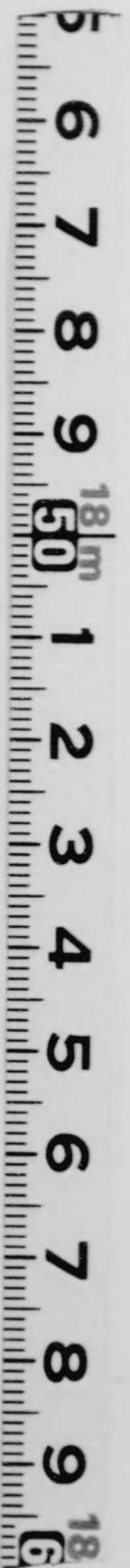


375  
11



始





36.1.26



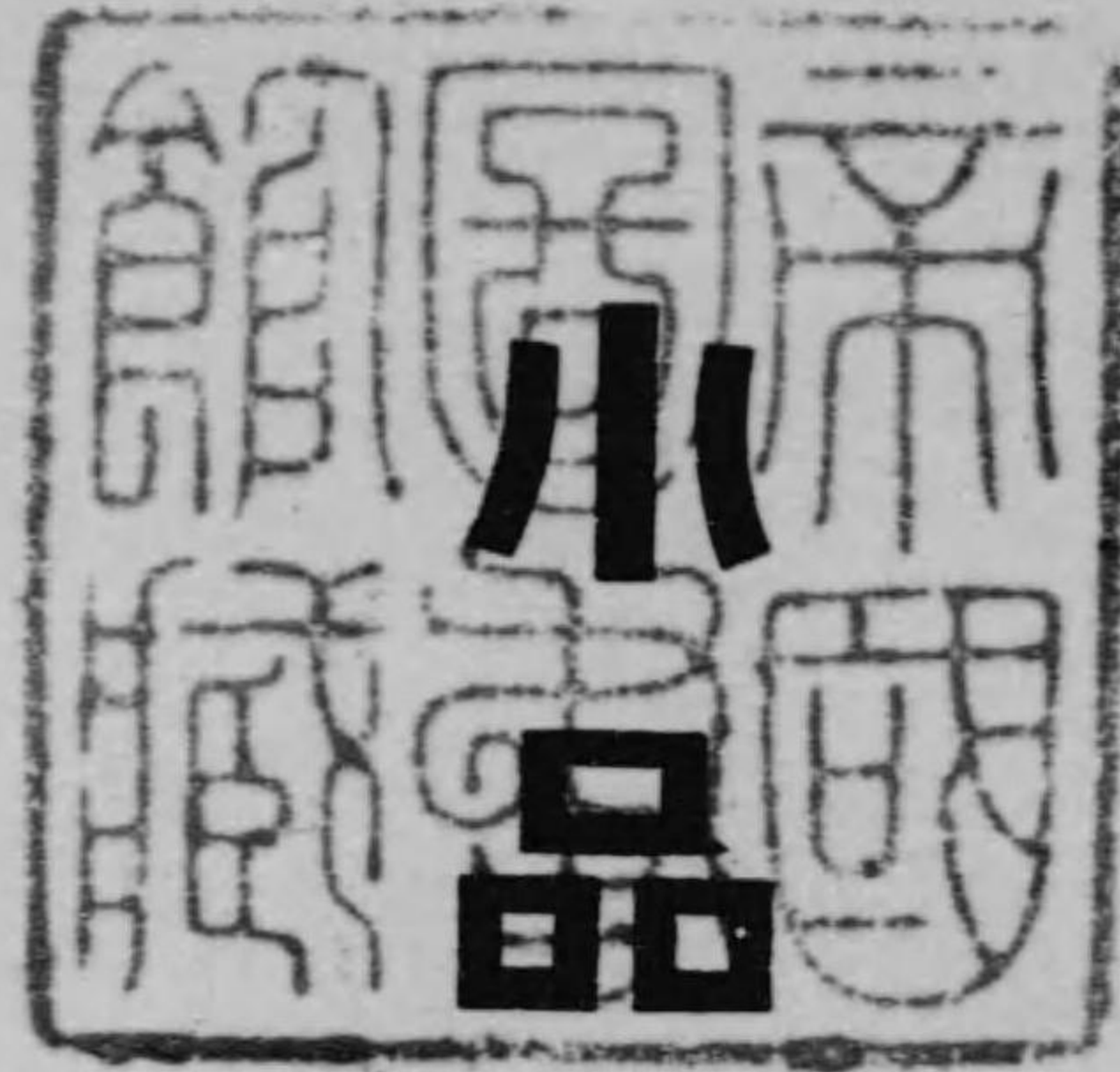
# 小品文作法

新文章速達叢書

第三編



375-11



# 文作法

新文章速達叢書 第三編

大正  
7. 6. 1  
内交





## 序

本書を編んだ第一の目的は、初學者が文章を學ぶ爲に、最も入り易く、さうして、利益の多い點から、特に、この「小品文」を選んだのに過ぎない。けれども、只漫然文章を書くこと云ふことは無意味だと思つて、文章の根本的目的、意義と云ふやうな點にも多少の筆を費して置いた。さうして、順次、内容、技巧の細かい方面の説明に進んで行つたのである。

便宜上、小品文の中に短文と云ふ名稱をも與へた。またハガキ文をも、その中に加へた。

尙、讀者に會得し易からしめる爲に、諸家の文例を添へて、些か評釋を施し、本文に於て足らざるところは、欄外に多少の重複を厭はず小さき説明を附することにしたのである。



## 小品文作法目次

### 第一章 小品文とはどんなものか

- (一) 小品文の性質……………一
- (二) 初學者の先づ學ぶべきもの……………四
- (三) 他の文章との關係はどうか……………九
- (四) 「量」と「質」とに就いて……………三三
- (五) 藝術品としての小品文……………二六
- (六) 現代の小品文とその作家……………三三

### 第二章 材料に關しての研究

……………二六



(一)	材料の選び方……………	二六
(二)	「経験」と「智識」が基礎……………	三二
(三)	空想や想像は先づ避けよ……………	三五
(四)	内容に對する批判……………	三六
(五)	生活から生れたもの……………	四〇
(六)	「思想」と云ふこと……………	四七

### 第三章 小品文はどり書くか……………

(一)	寫生から初めよ……………	五二
(二)	觀察眼を養へ……………	五四
(三)	強く感じねばならぬ……………	五七
(四)	印象を重んぜよ……………	五九

(五)	中心を掴むこと……………	六三
(六)	型に支配されぬこと……………	七三
(七)	模倣と獨創……………	七九
(八)	頭の中で練る必要……………	八三

### 第四章 文章上の諸注意……………

(一)	字句を簡潔にすること……………	八九
(二)	文字の選擇に就いて……………	九五
(三)	情趣を出す必要……………	一〇〇
(四)	比喩から暗示へ……………	一〇九
(五)	調子と整頓……………	一二〇
(六)	ウイットと警句の活用……………	一二三



(七) 推敲はどう云ふ風にすべきか……………一四八

第五章 いろいろの形式に就いて……………一五九

—並びに文例—

(一) 内容に伴ふ形式……………一五九

(二) 日記を主としたもの……………一六六

(三) 新らしいハガキ文……………一八八

# 小品文作法

徳田秋聲著

## 第一章 小品文とはどんなものか

### 一 小品文の性質

先づ順序として「小品文」とは何ぞやと云ふことから説

明してかゝらねばならぬ。

最も小品と云ふ名稱は、今日吾々は單に文章のみに對して用ゐてはゐない。他の廣い意味での藝術上の作品—



例へば、繪畫彫刻の如きものをも、さう呼んでゐる。つまり形と量に於て小さく少いもの、謂であつて、價値の優劣から來るのではない。大作よりも小品の方に遙かに優れたものがあることは、吾々の屢々見聞する事實である。手つ取り早い例を以て示せば、小品とは長篇小説に對して短篇小説と云ふが如きものである。

爰に「小品文」と云ふのも、同様の意味であつて、矢張形が小さく量が少いと云ふだけの相違であつて、他の諸種の名稱を與へられてゐる文章に比較して、何等他に變つたところはないのである。

故に小品文の制作は、豫め他からの制限があつて、作者がそれにあてはめて書くのではなくて、作者が任意に自

小品文は他の長い文章との比較から云へば、恰も長篇小説と短篇との相違の如きものである。

發的に人事自然の中から選んで來る題材や、それに對する感想によつて定まるものである。これは作者の經驗と、努力によつて、小品文として書くべきものか、さうでないかと云ふことを判別するやうになるのを待つより外に方法はない。

併し、それは大して困難なことではない。ちよつとした感想を述べたり、ちよつとしたスケッチをしたりするのは、勢ひどうしても、この「小品文」の形を藉りて來なければならぬやうになる。だから「小品文」と云ふ文章上の一體が生れたのは、極めて自然の現象であつて、古から幾多の人々によつて試みられた適例があるのを見ても分る。かう云ふわけであるから、小品文だからと云つて、輕視



すべきではない。また決して容易いものだと早合點してはいけない。その優劣は要するに、作者その人の人格技倆の如何によつて定まるのである。幾千萬言を費したもので、よりも、僅々數十字數百字によつて作られたもの、方に、より多く價值を認め得る例が尠くはない。特にまたさう云ふ方面により多くの才分を有してゐる人もある。

けれども、本書に於て説かんとする主要なる目的は、初學者が順序として文章入門の第一歩に於て、先づ入らねばならぬものとして、同時にまた最も學び易いものとして説いて行きたいと思ふのである。

二 初學者の先づ學ぶべきもの

然らば何故初學者の文章入門として小品文が便利で

小品文と雖も決して、その價値に於ては他の文章に遜色あるべきものではない。要するに作者の技倆そのものから來ることである。

あるかと云ふに、第一形が小さい、それから文字を驅使する上から云つても、材料を捉へる上から云つても、極めて簡易に手つ取り早く試みられる。従つて充分練習するの都合が好い。

諸君が日常目睹するもの、耳に聴くもの、或は心に浮ぶ感想——さうした小情小景は直ちにとつて以て小品文の材料になり得るものである。さうしたものは直ちに書き易い。そして幾つでも書ける。數多く書いて、而かも、充分推敲が出來ると云ふことは、文章を學ぶ人にとつて、何よりも都合の好い、便利なことではあるまいか。これに對して、少しく長いものになると、第一材料の統一按配から大變である。筆をとるに至る迄の工夫や頭の中で思想を練

小品文は小情小景を材として、直ぐに書いて、そして推敲のし易い利益がある。



ることがまた困難だ。その上、これに適當な文字を選んで紙の上に寫す段になると、一層表現が難しくなつて來る。そして結局得るところは、骨折損の草臥儲けである。出來上つたものは、まるで支離滅裂なもので、訂正するにも、推敲するにも、どうにも手のつけやうのないやうなものである。

このやうな、無駄な骨折は何等の利益も得られない。だから、どうしても短かくて、分量の少ないものから初める必要がある。と云つても、小品文は決して長いもの、一節ではなくて、それ自身獨立したものであるから、頭もなく、尻もないやうな中途半端なものであつてはいけない。それだけに骨も折れるが、また書くだけの價值があるのであ

小品文は長いもの一節ではなくてそれ自身獨立したものである。そこに價值がある。

る。これは丁度大きな家と小さい家を建築する場合のやうなもので、譬ひ、まだ大きな家を造る技術がないからと云つて、小さい家を造るのに、家の一部分である臺所や押入や物置だけを造るやうな考へでは駄目だ。小さいながらも、すべて完備してゐなければならぬ。併し、この小さな大工も、かうして、幾多の練習を積んで、腕を磨いて行つて、初めて、大度高樓を造ることが出来るやうになるのである。だから、小品文を書くことはあらゆる意味に於て、文章の練習の目的に叶ふものであることは勿論、一面、ゆくゆく大作や長篇を書く準備をするのに必要なのである。かうして、比較的時間と努力に於て經濟的な小品文をなるべく多く書いて、想を練り、筆を慣らすといふことは

小品文を作ることは、他日大作長篇を作る準備ともなるのである。

Handwritten scribbles at the bottom left of the page.



初學者の是非選ばねばならぬ道であつて、同時に非常に利益のある方法である。

序でながら、是非説明を加へて置かなければならぬのは、新聞雑誌等に掲載される「短文」のことである。これが、小品文とどう云ふ関係にあるかと云ふと、ちよつと截然とした區別がつかかねる。短文と呼ばれてゐるものが、多く一枚とか、二十行以内とか云ふ風に募集する雑誌の方で制限されてゐるのみで、他に何等小品文と異つた點がないと云つても好いかも知れぬけれども、これはもとゞゞ雑誌などの都合上、さう云ふ風に文字や行数を制限したものであつて、別に深い意味がないと思ふ。併し、初學者がこれを試みるには、文章を簡潔にする上に於て、また、小

い材料を書き扱す點に於て、種々の利益があらうと思ふ。が、私は小品文よりも今少し軽く見て置きたい。何故かと云ふに、格言風のもので、思想、感想等を率直に現はす場合を除いては、さうした短い制限の中で立派な一つの纏つた文章を組み立てることは、可なり困難なことである。で「短文」に於ては、ある一つの纏つたものから云へば、その一部分、譬へば家ならば、その書齋であるとか、物置であるとか云ふ部分的のものを造る意でやつた方が好いと思ふ。その方がより多く意義があり、効果が多いと思はれるのである。

三 他の文章との関係はどうか

従來我國では可なり多くの種類に「文章」の分類が行は

所謂「短文」なるもの、意義は小品のより短かいものとして見ても好いが、ある部分的のものな一つの文章にする位に見ても好いと思ふ。



れて居る。多くは内容の上から分けられたもので、論文、叙事文、紀行文、抒情文、書簡文、小説等であるが、これ等は先づ便宜の上から行はれてゐるものと見て置かねばならぬ。厳密に区分する日になると、かう云ふ風にはつきりと分けられるものでない。叙事抒情の二つの分子が混り合つてゐるのもあれば、論文七分に、叙事三分のものもある。或は書簡文に論文の加へられたものもある。

これを作る者の側から考へても、学校の課題とか、ある必要からでなければ、その分類法に従つて作るものでない。自然にさうなれば、兎に角、さもなければ、文章を作らうとする要求は、作る人それ自身の内心から生れるのであるから、文章の種類などの制限があることは甚だ窮屈で

厳密にいへば文章の分類がさう幾つにも行はれるものではない。只便宜上さうするのである。

ある。こんな事を念頭に置いてかゝつては、自然に流露する人間の感情も抑へねばならぬし、筆端の窮縮することは自明の理である。

ところが、有難いことには、小品文にはかゝる内容上の制限も、形式上の拘束もない。何を書いても好いのである。實に自由自在である。作者は自分の觀た儘、思つた儘、感じた儘を、何の顧慮するところもなく、只如何にして完全に表現すべきかと云ふと、全幅の苦心を注げば好いのである。通信文風に書いても好い、日記文の體をとつても好い、或は小説風に描いても好いのである。實際、小品文の中には、立派な小説になつてゐるものがあり、また、所謂短篇小説と呼ばれて居るもの、中にも小品文がある。



このやうに、小品文の内容の範囲は單に廣いのみでなく、凡てを含んでゐるのであるから、そこに他に見られぬ独自の境地があり、面白味がある。故に、他の種々の文章との關係は相對的のものでなくして、絶對的のものといつて好いのである。

ちよつとつけ加へて置くが、他の小説文章等の長いものゝ中に、その一部分だけをきり離して見ても、立派な一個の小品文として獨立して存在する價值あるものを發見することは屢々ある。無論さう見ることとは、別段差支はないけれども、それだからと云つて、長い文章は小品文の繼ぎ合はせであるかと考へてはいけなまいふことを承知しなければならぬのである。

小品文ほど自由で形式にも内容にも拘束のないものはない。そこに独自の境地がある。而して、内容的に云へば他の文章の領域に迫り殆んど短篇小説の範圍にまで喰ひ入ることが出来るのである。

四 「量」と「質」とに就いて

以上説いたところによつて、「小品文」とは獨立して存在する價值のあること、作者が自由自在に何でも書いて好いこと——それから、只形に於ては小さく短かいものであるといふことが理解されたであらう。そこで「量」と「質」と云ふ問題が生じて來るから、一應考察して置く必要があらうと思ふ。

量は云ふまでもなく、外容のかさである。質は中味のことである。適當な比喩ではないかも知れないが、茲に假りに人間で云ふならば量は肉體のことであつて、質は精神のことであると解しても面白からうと思ふ。人間は如何なる者と雖も精神を有して居らぬはない精神のない者

小品文は形が小さいだけに、中味の善悪が眼につき易いから、自然内容本位となる傾きがあるが、併し、内容を現はすことも技巧の如何によるのだから初學者は



は死人である併し、どんなに立派な大きな肉體の所有者でも、精神の働きが鈍かつたり、病氣があつたり、または弱い者は、眞の健康でなく、また優良な人間と云ふことも出来ない。

「小品文」に於ても丁度これと同じやうに、肉體こそ小さく貧弱で、分量は軽いやうに見える併し、中味となるべきもの、即ち精神の働きは、決して他と比べて劣つてゐるやうなことはない。ゐてはならないのである。徒らに分量ばかり多くても、無智なる者をごまかすことは出来るが、直ちにその内容を見透すところの具眼者を欺き終せることは出来ない。だから、小品文だからと云つて内容を輕んずることは出来ない。量が少いだけに内容が際立つて眼

よくこの事を辨へて置かねばならぬ。

につき易いから、そのところをよく辨へて置かねばならない。最も内容と云つたところで、材料の善悪といふことも重大な關係を以てゐるが、譬ひ同じ情景を描いても作者その人の有してゐる天分によつて、内容の優劣、善悪厚薄が定まるのだから、結局の問題はその人の如何に歸することになる。單に文字を配列し驅使する以外に、そのよつて來たるところの作者の思想感情を吟味しなければならぬ。この事は後章に於て詳説するからこゝで管々しいことは述べないが、要するに、量よりも質が大切であること、従つて小品文の如き量の少いといふことを第一の條件とする文章に於ては、益々この「質」の好いのを尊しとしなければならぬことを一言して置けば

如何なる大作長篇よりも短篇の方が遙かに優れてゐることがある。それによつて見ても、



好いのである。故に單に練習の爲に、小品文を書いて見ようとする初學者に有つても、よくこの事を念頭に置いて決して閑却してはならぬことを切言したい。それでないれば、只書く事だけが達者になるだけで、内容の上の進歩がなくなつて了ふのである。

五 藝術品としての小品文

「小品文」が立派な藝術品として存在することは既に述べたし、また、最早繰返す必要を認めないが、後章に於て實用的の意味を主とした「日記文」や「ハガキ文」なども、小品文の中に含めて説明する關係から、茲に一應藝術としての「小品文」に就いて數言筆を費して置くのも無駄なことではなからうと思ふ。

容器は小さくても  
價值のある中味を  
盛ることが出来る  
と云ふことが分る  
であらう。

勿論、實用的の意味を多分に含んだ日記とかハガキ文などにも、偶々藝術として優れたものを發見するが併しこれは最初からその目的で書かれたものではないのである。作者の人格から偶々迸り出た詩的な感情や、熱烈なる思想の表現が自然と、藝術的文章を成したものである。つて、作者が意識してやつたのではないのである。それ等のものをも、藝術品と見なければならぬが、茲では藝術品として作らうとする人々の爲に一言して置くのが主旨なのである。

藝術——即ち文學上價值のあるといふのはどういふことかと質問されると、勢ひ難かしい「文學論」などを持ち出さなければならぬことになるが、それほどにまでする



必要は先づあるまい。何かもつと簡單なことで充分會得するやうに説明が出来ると思ふ。

早い話が單に旅行を報ずる文とか、試験の及第を知らせる文とか、また單にその日、その日の出来事を記述して置く日記文とかを見て、これが藝術だなどと思ふ者は恐らくあるまい。また、多少でも文學の方面に志す人にあつては、そんなものを幾ら書いたところで、慾望を満足させることは出来まい。どうしてももつと深い強い心の要求や、感動を現はしたく思ふであらう。そこで、ここにまづ藝術的作品の生れる根本的動機がつくられるのである。人間には誰でも——田夫野人であらうが、悪人毒婦の類であらうが、感情を以て居る以上は時として藝術的感興の

藝術家と云ふものは單に専門家にのみ與へられた名稱

湧上るのを覺えないものはなからう。極單純な原始的なところでは、月を見て美しいと感じ、蟲の音をきいて哀れと思ひ、或はまた、人情の美しさに觸れて涙を催ほし、義人節婦の健氣な振舞を見て感動させられる。併し、彼等はその表現法を知らない。只、拙い言葉で語るとか、黙つて涙を流すとかするより外はない。けれども、多少でも文字を知るもの、況んや、文學的の素質あるものは、直ちにこれを書き現はしたいと云ふ要求に迫られる。そこが、藝術家に與へられた特權であつて、また、尊いところである。これを書く者の満足するのみでなく、これを讀む者にも同じく、若しくはより以上の感動を與へずには置かないのである。そこに一つの藝術の世界が生れる。一視平等の天國であ

ではない。ある根本的の強い要求を感じ、天分を有するものは皆藝術家である。藝術家にはある特權が與へられてゐる。それは、そこに理想的世界がつくられるからである。



る階級もなければ、強者も弱者もない人は皆同じやうに悲しみ、歡び合ふことが出来る。藝術の尊いことはこゝにある。

藝術の世界にあつては、富める者、権力ある者が必ずしも恵まれるのではない。純潔なるもの、眞實なる者が幸ひせられるのである。従つて王侯宰相と雖も、一漁夫一下女の美しい感情の前にも頭を下げさせられなければならぬ。かくの如き絶對の境地にあることは、ちよつと考へるだけでも愉快なことではないか。

そこで話は元にかへる。即ち藝術としての小品文も、これを視はねばならぬ。作者はそこへ入つて行かねばならぬ。また、作者の心にさうした境が開けねばならぬ。單に零

碎な文字を以て描いた叙景の中にも、抒情の中にも、かうした作者の第一義的の生活が營まれてゐなければならぬ。實用文を書くものは、只用さへ足りれば、好い併し、藝術の作者はもつと大きな使命を感じつゝある人でなければならぬ。

かう云ふ風に考へて來る時、百姓でも、銀行員でも、小僧でも、丁稚でも、誰でも好い。少しの暇を偷んで、僅かに一枚や一枚半の紙に短かい文章を書くといふ事も、この態度と覺悟を失はなければ、實に立派な事業をしてゐるのと同じことである。さうして、かう云ふ人が一人でも多いといふことは、人類の生活が一步一步理想境に進みつゝあると云ふ證左により得ると云ふのも、妄言ではないと思

藝術を作る要求を感ずるものは、誰でも好い。如何なる職業、境遇にあるものでも、藝術的感興を發露すれば好いのである。それには小品文によつて自由に發表するのが一番近道である。



はれる。

六 現代の小品文とその作家

「小品文」といふものは敢て現代に至つて始めて生れたものでないことは、餘りに分りきつた事實である。我國でも、古來からの學者文人、その他種々の方面の人達が書き遺したものの、中に、多くの優れた小品文がある。支那にも、西洋にも、凡そ文字ある國には、世界到るところにある。枕の草紙とか、徒然草などの隨筆類も小品文の上乗なるものである。漢文で云へば、山陽小品、東坡小品など云ふものもある。ロシアのツルゲネフ、フランスのボドレール、イギリスのオスカー・ワイルドの散文詩と稱せられるものも、好個の小品文として、その範疇に入れることが出来る。

小品文に屬するものは、時の古今を問はず、洋の東西を問はず、いづこの國にでもある。併し、初學者には、一番近い親しみ易い現代の我國作家の作品に就くのが好いと思ふ。

思ふ。その他、人と作物とを數へあげる段になると詩を除いた短い文章は、凡て、小品文の中に加へても好いのだが、殆んど數限りもない程である。それは、讀者諸氏が機會ある毎に任意の研究に待つことにして、爰では、最も知り易く、且つ學び易い現代の我國文學者の小品文と作者に就いて、少しばかり紹介と説明の勞をとりたいと思ふのである。文體に於ても、思想に於ても、同時代の人と作とに就くのは、初學者にとつては、最も便利であると共に、順序でもあらうと思ふ。

所謂隨筆の部類に屬するものとしては、幸田露伴氏や、大町桂月氏の書いたものに優れたものがある。殊に、文章體ではあるが、桂月氏は流石に一代の文章家であるだけ



に簡明にして、達意暢達の筆致は言文一致の自由なるも、尙及ばざる程で、議論風にしても、叙事風のものにしても、とつて以て範とすべきものが多い。その他、桐牛にも、縁雨、一葉の書いたものにも、好い小品がある。何れも機会あらば、熟讀玩味して見るのも好からう。

現在に於ては、どの作家にも小品のない人はない。そして、その作風や内容を研究する上には、なるべく多く見て置く必要があると思ふが、殊に、中でも小品文作家とも云つて然るべき程、多くの作品を発表し、且つ上手な人も可なりある。響「森」などを著した水野葉舟氏は、繊細で、感覺を寫すのに巧みである。同氏と合著になる「あらゝぎ」の作者窪田空穂なども、歌人として以外に、氏の技倆を伺ふこ

とが出来来る。故三津木春影氏にも小品文集の著書がある。散文詩風のものである。高須梅溪氏も以前に多く書いた。田山花袋氏の隨筆風のものや、紀行文の中には、氏一流の特色のある小品文が澤山ある。森鷗外氏、島崎藤村氏、永井荷風氏の隨筆や、短篇の中には、小品文の模範として好いのが澤山ある。共に一代の文豪であるだけに、文體や文字を驅使する方法に於て學ぶべき點が非常に多い。小川未明氏の率直にして、力強き表現、秋田雨雀氏の氣品ありて新らしき、最近毒藥の壺、凡人淨土、田園春秋等を書いた相馬御風氏の簡樸にして、自由なる筆致、近松秋江氏の味のある文章など、皆當代の逸品揃である。その他、女流に於ては、田村俊子、素木しづ子氏等に愛すべき小品があり、鈴木

現時文壇の小品文作家のものを讀んで、その特色を知り、技巧上の研究をして見ることは、單に利益を得るのみならず、他の俗惡なるものと違ひ



三重吉、中谷徳太郎、豊島譽志雄氏に散文詩の香高く色彩豊かなるものがある。以前眞山青果氏に「海邊より」等の優れたものがあり、夏目漱石氏の「夢十夜」とか「硝子戸の中」も小品と見做すべきであらう。

今尙萬人に愛讀されつゝある徳富蘆花氏の「自然と人生」を初め、「青山白雲」「青蘆集」みゝすのたはごとの中には得がたきものがあると思ふ。

この外にもまだくゝあるであらうが、以上に挙げた人のものは、それくゝいろくゝな意味に於て、及び難き特色を有するもので、人事を描く點に於て、或は自然を寫し、感想を述べる點に於て、盡く手本とすべきものであるから、初學者はよく熟讀して、學ぶところがあらねばならぬ。

娛樂の爲めにも好  
いと思ふ。旅行な  
どに携ふるには至  
極適當であらう。

何事も先づ人のすることを見てゐて、それを自分のする場合に應用せねばならぬのであるから、多くの作物を讀み味はつてゐるうちに、自分の進むべき道を發見し、描くべき方法を悟得するであらうと思ふ。決して初めから驕慢になつて、人の作を侮蔑してかゝるやうな事があつてはならない。



### 第二章 材料に關しての研究

#### 一 材料の選び方

「小品文」の材料となるべきものは凡てある。この事はもう改めて云ふ必要のない程分り切つた問題であるが、それでは餘りに漠然としてゐて、初學者の爲めには、もう少し微細に互つて、具さに攷究して置く必要がある。

私は材料のことについて述べる前に先づ警告を與へて置かねばならぬ一事があることを痛切に感ずる。それは外でもない選ばれる「材料」そのものよりも、選ぶ人の頭の問題である。感じて受け入れること、或は進んで捉へることには何れにしても、その人の頭が働かなければなら

材料は要するに、何でもよいのである。それがよい文章となるかは、悪い文章となるかは、第一に作者その人

ぬ頭と共に心が働かねばならぬ。何故ならば、單に材料と云ふことのみ心懸けて、あれか、これかと、好いと思ふものを探し廻つてゐては、いつ迄経つても、筆が執れないからである。そんな考へは極めて舊式の古いものである。名勝の地へ行かなければ立派な叙景が出来ないと思つたり、異常な事に出會さなければ、非常に人を感動させるものが出来ないと思つてゐたら、或はその人は一生何も書けないかも知れない。そんな事では駄目だ。文章の眞髓と云ふものはそんな點にあるのではない。一體、材料としての「人事自然の萬般の事物」は、皆な素材——即ち生の儘で轉がつてゐるのである。それを如何に育み、練り、書き扱すかに、文章として表現される苦心と努力が必要なのである。

の頭にある。頭がよく働ければ到底その材料を生かすことが出来ない。



だから、材料を選択することは、その物の善悪と云ふやうな價値の判断を先にすべきではなくて、その人の心に感興を惹き、觸れて来るあらゆる事象を、如何に鮮やかに適確に描出さるゝかと云ふとに、重きを置いて始めて、意味を生じて来るのである。殊に小品文に於てはそれが必要である。大なる事件、大なる構想よりも、極めて零細なる材料から發見して書き初めねばならぬ性質であるから、譬ひどんなものでも馬鹿にしてかゝつてはならない。「つまらぬものを材料にしたものだ」とか「下らぬことを書いてゐる」と云ふ文章に對する批評をよく聞くことがあつたが、よく／＼考へて見ると、それは、材料そのものが悪いのでなく、作者の感興が充實して居らず、觀察が行

き届いて居らず、描くべきところと、省くべきところとの取捨が行はれて居らず、更に適切な文字を驅使する能力を缺いてゐる等の點に、その「つまらない」とか「下らぬ」とか云はれる原因が伏在してゐるのである。文章の難しいと云ふのは、つまりそこにあるのだが、初学者にあつては、その簡単な理窟の分つてゐない人が殊に多いのを見受ける。それは要するに頭が出来てゐないから、材料が纏まらぬのであつて、決して材料の選び方が悪いのではない。更に進んで云へば書き方を知らないからである。書き方に就いては後章に譲るが、爰では改めて、要するに材料は何でもよいが併し、それを書くには頭の準備が必要であることを繰返して置きたい。

田山花袋氏は「天才と云ふものはあるものぢやない。天才は努力である」と云はれた。たしかに一理ある言である。如何に天才がある人でも努力をしなければ、天才はみがかれない。また完成しない。努力！努力！それさへあれば好い材料の如何など問ふべきでない。



二 「經驗」と「智識」が基礎

材料は何でも好いが、それを捉へて立派な文章とするには、頭と心との働きの必要だと云ふことを前節に於て述べたが、然らばさうするには、どう云ふ手段方法をもつたら好いかと云ふ問題に逢着して来る。以下、その事に就いて追々に述べて行きたい。

私の知つてゐる人の中でも、よく何を書いて好いか分らない。どうも書くことがなくて困る。などと嘆聲を發してゐるのを聞くことがある。これは強ち、小品文を書く時とは限らないが、併し、さうと假定して考へても差支ない。私にはかゝる嘆聲を發するのは、文章を書く事を生命としてゐる人にとつては大なる恥辱であると思ふのである。何

小品文には何を書いても好いのである。それは、特にさうした許された世界があるのではなくて、何だつて、その人の書き方によつては、立派な文章となるからである。畫家が静物

故書くことがないのか、書くことは幾らでも轉がつてゐるではないか、かう云つてやりたくなる。書くことがないと云ふのは、書くべきものを捉へる働きのないと云ふのと同様であつて、頭が枯渴し、感情が乾涸びてゐる證據だと云はれても仕方がないのである。

そこで、先づ書くべきことを豊富にするには、「經驗」と「智識」を尊重して貰ひたいと思ふ。未だ、經ざることには經驗とは云へないし、未だ知らざることを知識とは云ひ得ない。だから、初學者は何よりも、見たこと、聞いたこと、感じたことを、そのまゝ、正直に心の中に展べて吟味して見る。ことが肝要である次第に、經驗と知識とを積み増して來れば、冒險的に、それから類推して、新しい世界を開拓すべく、

を描く場合に、只一本の花、一個の瓦を描いても、立派な繪畫となるのと同様である。



足を踏み入れて見るのも、好いかも知らぬが、初めからそれをやつては危険であるばかりでなく、救ふべからざる邪路に入る恐れがある。だから、どんなことでも好い雪が降る朝の寒い感じを書いて好いし、ちよつと親類へ遊びに行つて、その一家の人達と爐を圍んで話してゐる状態を書くのも好い。また、うら枯れた丘の草木に夕日があたつて、刻々に光線と色彩の變化してゆくのを書いても好い。好いどころではない。それで、立派な小品文が出来上がるのである。譬ひ一木一草の微小なるものを描いても、永遠に滅びざる藝術品が生れるかも知れないのである。併し、それは、かう云つて了へば容易なやうであるが、さうした経験をしつかりと心に留めて置く必要がある。只好い

何を書いて好いと云ふ自由は許されてゐるが、併し、一番確實で、危つかしげのないものを書くにはどうしても、自分の直接経験したのから初めればならぬ。それは、智識と、實感が一番の根柢になつてゐるからである。

加減の上の空の経験では、たとひちよつとしたその時の光景でも、書き得るものではない。また、草木にあたる光線の變化を描くにしても、それだけの智識がなければ、書き分けられない。と云つても、経験や智識は追々増してゆくにしても、兎も角、限りがある。だから、自分の有つてゐる範圍のもので、眞面目に着實にやつて行けば好いのである。文章を書く上に、ごまかしや馬鹿げた誇張は大いに禁物である。

兎に角、自己の経験と智識を基礎にしてゐると云ふとは、確實で、安全なことである。その上は、それを如何に表現すべきかと云ふことがある。ばかりだから、技巧の問題になつて来る。



三 空想や想像は先づ避けよ

それでは、空想や想像は経験や智識とは非常に距離があるものか併し、或る場合には、作者の精神的経験や智識と云ふことが出来るではないか——かう云ふ質問があるかも知れないなる程、一理はある。私だとして、強ちそれを否定し去る精神はないだが、只それは、文章道に於て、既に餘程の習練を積んだ人に許さるゝとであつて、初學者の濫りに弄ぶべきものではないのである。見給へ、今日繪畫を學ぶ學生に有つても、最初には一生懸命にデッサンをやるとして、物を正確に描く方法を學ぶではないか。青春の人々には奔放自在なる空想の閃きが時として、作者それ自身をも眩惑するのを感じるのであらう。また、限りも

空想や想像を避けよと云ふことは、即ち「現實」を對稱とせよと云ふことである。しかしこれは主觀を主とするなと云ふ事ではない。派手主義が滅んで、自然主義が起つた文藝の

ない想像の翅に乗せられて天界を飛翔するやうな思ひを抱くこともあらう。そこにも、文章に描くべきものはあるけれども、それは、自分だけのものであつて、他から見れば、極めてありふれた無意味なものである場合が多い。こんな夢のやうなことは、かきに耽つてゐては、到底正確に本當のものを掴むことは出来ない。繪を描くにしても、怪しげな想像畫を描くよりも、一個の林檎でも、一個の火鉢でも、それをあるが儘に描く方が、よつほど、爲にもなるし、意義もあるのである。それと同じく、文章を描くにも、實際的のことを幾篇も書いて、習練を積んで行つて、それから、空想や想像をも充分、實在性を帯びさせる迄に、進歩させて行かねばならない。

史の意味を考へても、先づ實際から入つて行かねばならぬことが分らう。



勿論、眞實と云ふことは、物質的な實際的のことばかりに用ひられる言葉ではないが、一木一石の状態を描く事すら、それをさながらに力強く現はすことの困難なるを知つたならば、徒らに自己の微力を描らずして、無思慮にあらぬ方へ手を伸ばして行くべきではなからう。文章を學ぶ上に、日記文の練習が必要とせられ、寫生や觀察の重要なことを力説せられるのを見たならば、これ迄説き來たつた理由が奈邊に存するかは、直ちに了解されるであらう。

四 内容に對する批判

文章の内容となるべきものは、材料そのものであることは勿論だが、併し、素のまゝの材料ではいけないと云ふ

ことは前にも述べた。

こゝに風景を描かうとするところで、只木あり、石あり、草あり、と云つたところで、何の面白味もない言葉の分らぬ異國の人が名詞だけを並べるやうなものである。また如何に巧みに、その光景を寫したところで、それは到底寫眞の精密には及ばない。文章を書くにはそんなことではいけない。譬ひ同じ風景を描くにしても、そこに萬人萬様の變つたものが出來上るに違ひない。また、それで好いのである。

どうして變つて來るか、と云ふに、それは、各違つた作者の考へが材料に加はつて行くからである。材料と作者が融合したとも云へやう。また作者の觀方の相違とも云ふ

「批判」と云ふことも、すべて、智識を元とした判断と云ふ風に解してはならない。寧ろ、直觀の重んずべきものであると云ふべきである。直觀とは何ぞや？と云ふと、だん／＼むづかしくなつて來るが、何でも直接見て感じたことと云つた位の意味に解しても、差支はなからう。



へやう併し、こゝでは、作者の「批判」が加はるからだと言つて置かう。その方が説明するのに便利でもあり、分り易いと思はれる。

この「批判」と云ふ意味は、必ずしも、これは好い、あれは悪いと云ふやうな露骨な価値を定める批判ではない。さう云ふ場合も無論あるが、もつと繊細な問題である。さうしてもつと複雑な意味を有つてゐる。つまり、作者の全人格——その中には、理性もあり、感覺もあり、種々なものがあるが——を以て現實に肉薄して行くところに、さうして、それを捉へて、自分のものとするところに、どうしても批判が加へられることは、想像に難からぬであらう。

試みに、こゝに、手近にある一冊の文集の中から若い人

の手になつた短文の一節を引いて見よう。題は「錐のやうな風」としてある。

はれた空は又曇つた。かうした單純な天氣が幾日か續いて、暗に鎖された様な心持になつた。高く積まれたあつた稻も地上に其の影を失ひ、なつかしみのある日の光もうそ寒く鎖されて、やせ枯れた病人の様な、然し錐の様な鋭さを含んだ風が吹く頃となつた。

此文章は難點のうちどころのないものとは決して云へない。併し、これを通じて、秋から冬になつてゆく光景が想像されると共に、作者がどう云ふ心持でそれに對してゐるかと言ふことが鮮やかに現はれてゐる。作者は自分

寫生と云ふことも純然たる寫生はあり得べからざるこゝとである。どうしても、作品の主觀とか思想とか云ふ増幅を續されて來なければ、表現は出來ない。そこに作品としての味ひが出て來るのである。



の心持の説明をしてゐるのでもなければ、また、眼前の風物を藉りて、その心持を現はさうとしてゐるほどの企てがあるでもない。眼にうつり、肌に感ずる光景や、氣候に對して、殆んど無意識のうち、批判が加へられてゐるのである。それが、形容詞となり、主觀的の文字となつて現はれたのである。客觀的に物を見ると云ふことは、既に主觀の批判が働いてゐると云ふ事である。

右にひいた文章を今一度例にひいて、若し別の人であつて、單純な天氣と云ふのを變化の多い天氣と鎖された様な心持を、動搖し易い心持とし、風の形容を、氣性の劇しい荒武者のやうな、然し、天地の哀しみを含んだやうな、でも書いたら、どんなものだらう。讀む方では、矢張、作者の

フランスの文豪フロベールの云つた言葉に、ものを描くには只一つの言葉しかない云つたが、その一つの言葉を選ぶには、暗中摸索の長い時間を續けなければ

さうした表現によつて、その光景なり、心持なりを想像するより外はない。要するに批判と云ふことは、作者その人によつて定まるので、それ自身に獨自の價值があると同じ時に、また、これを客觀的に見れば、文章全體に於ける優劣が分れるのだから大切なことである。

併し、初學者はこんなことをあまり念頭に置いてはいけない。正直に感じた儘を書けばよい。そこには、正直な眞實の批判が加へられるのだから。

五 生活から生れたもの

諸君が「小品文」の一つでも書いて見ようとか云ふには、單にこれをひとつつうまく書き現はしてやらうとか、單に變つた綺麗な文字を覺えて使つて見ようとか云ふ事の外

ならない。だから感じたまい、思つたまいと云ふうちにも、出来るだけ動かないことを捉へて書く必要がある。



にもつと重大な意義のある問題がその根本に横つてゐることをしつかりと心に感じて置く必要がある。それは「自分の生活を慈しむ心」と云ふことである。

人間何人と雖も生きて居る以上は、そこに儼然として存する生活がある。さうして、その生活を離れては凡ては空である。文章も、勿論、その生活から生れるものに外ならない。否、どんなことを書くにも、生活が材料の根本であり、基礎である。よし、一木一草を描くにも、他人の生活を書くにしても、また無機物、有機物の別もなく、一度、作者のものとして、描き出されるからには、そこに、作者が生活してゐる事になるのである。

若し、こゝに人があつて、文章を書かうとする要求なく、

さうした才能を有つてゐなかつたならば、如何に隙間の多い、空疎な精神生活の状態を續けねばならぬであらう。反省のない向上のない生活を營まねばならぬであらう。それは、富を造るための努力と緊張とはあるかも知れぬ。節儉や健康に對する反省はあるかも知れぬ。

併し、もつと大切な尊貴な生活の根本義が閑却されてゐることは容易に氣付かれねばならぬ。ところが、文章を書かうとする程の人にあつては、もつと心が微細に働く。木の葉の戦ぎに對しても、小川のせゝらぎをきいても、名も知らぬ野の花の開落や、鳥や虫の生死などに對しても、軽々に看過することが出来なくなる。必らずや、そこに天地自然の秘密を感じようとして、優しい情操が生れて來

生活は誰でもしてゐる。さう云つて了へば問題は無い。しかし、その生活感を絶えず把握してゐるものがあるかと云へば、それは容易に然りとは云へない。無意識の生活、迂濶千萬な考へでの生活は何等の意義もなく、向上がない。文章を書かうとするものもそれが、自然と得られるのである。



る。また、人間同志の葛藤や、ふとした心の現はれに對しても、必らずや、その根本に立ち入つて見ようとする愛が生れる。かう云ふ状態にあることは、絶えず人格を磨き、良心の働きを鋭敏にしてゆくことになる。よき人格からは、よきものが作られると云ふ言葉はこゝに至つて、その眞實であることを知る事が出来る。

よつて、文章を書くとき云ふ心は生活を慈しまふと云ふ心であり、生活を慈しむ心から生れるものは、文章であるといふことが云へる譯である。だから、諸君は文章を學ばんとするには一層生活を大切にしなければならぬ。特に「小品文」を書かうとする諸君は、生活が凡ての題材だからと云つて、それを切賣にするやうな蔑しい心にな

よき生活と云ふ事は何にも經濟的や、物質的のそれではないのである。そればかりに重きを置いた生活は寧ろ悪い生活である。文章に現はれるよき生活は寧ろ、精神生活の方を指さすのであつ

つていはけけない。文章を一つ書くには、そこに、一つの人格の完成があるのだと云ふ位の意氣と覺悟を以てゐて貰ひたい。うまい、まづいななどは、次ぎの次ぎの問題である。決して、文字を弄ぶに止まらず、生活をも弄ぶやうな墮落に陥つて貰ひたくないものである。文章を書くことは、決して虚榮や、虚名のためにするものではなく、これ程大切な「自己の生活」と云ふ問題が含まれてゐることを三省して心に銘記しなければならぬのである。

六 「思想」と云ふこと

「材料」に關する研究の中の一項目として、「思想」と云ふことに就いて一言して置くべき必要があると思ふ。小品文であらうが、何文であらうが、苟くも現代に於て

て、陋巷に朽ちてゐるものや、流浪者の中にもこのよき生活を營んでゐるものは深山にあ



發表される文章には、その根柢には何等かの思想がある筈である。「思想」に就いて、好い加減な考へを抱いてゐるやうな青年は先づ今日ではあるまい。多少でも新しい知識を得、多少でも讀書をしてゐる程の人には萬々そんな事はなからう。何故なれば、思想は實に人間の生命の最も重要な一部を占めて居るものだからである。そして、何等かの思想がなければ生活する事の出来ぬ時代となつてゐるからである。こんな風だから、苟くも自己を表現し、そして、他人に傳へようとする目的を以てゐる文章ならば、よくそれがどんなものであらうとも、單純な本能や感情の力だけでは、人を動かす力は薄弱になることは免れな

「思想」と云ふことも直ぐにむづかしい難解なものとか考へてはいけない。事物に對する考察の現はれが思想である。だから、何に對しても少しも考へることがないやうな人は思想がないと云つても過言ではあるまい。

ならぬ。  
只、單に「愉快だつた」とか「可笑しかつた」とか云ふだけならば、とても人を動かすことが出来ない。そこにはどうしても、あとく、迄も深く心の奥に残つて居て、長く忘れさせぬやうな力ある或るものが存在してゐなければならぬ。それが、即ち「思想」である。故に初學者に向つて、直ぐに思想的のあるものを示せと云ふやうな註文を出すのは、酷であり、不條理なことであるが、これから文章を書いて行かうとする程の人は、將來最も重んずべきは「思想」である。ことを銘記しなければならぬ。思想さへ卓越して居れば、文章の少し位まづいのは、ほんの白玉の微瑕として看過されるほどの新らしい時代が來てゐるのである。



だから、いつまでもちよつとした思ひ付きや、感情の力で人を動かさうとしたり、巧みな云ひ廻しや、文字面を人をおどさうと云ふやうな考へは、初めから持つことを止めて、すべてのことに對して、努めて誠實に、そして、何よりも一層深く、廣く、細く、高く物を考へるやうにしなければならぬ。固よりわざ／＼小品文を一つ書く爲に、哲學の本を引つぱり出したり、宗教的の書を繰つたりするのではないが、思想の涵養と云ふことを心懸けてゐる人は、人格として立派であると共に、やがて、よき文章を書き得る資格があることになるのである。

「思想」的の根柢が  
あれば、直ぐに考  
へが廻り易い。ま  
とまらなくても、  
その文章に人格的  
の統一が出来る。  
それが尊いのであ  
る。で、思想のな  
い文章は骨のなき  
やうな有様となり  
易いのである。

ならない。思想は恰も黄金や、金剛石のやうなものである。一小粒と雖も、その存在するところには、大なる光輝と價値が生ずるのである。

繰り返して云ふ、思想の涵養こそは是非努めなければならぬ。それには書籍を読んで廣く思想を吸収すること、必要である。また、今日の社會の事物が充分了解の出来るまでに、知識を養ふことも必要である。



### 第三章 小品文はどう書くか

#### 一 寫生から初めよ

「小品文」とは一體どんなものであるかと云ふことは既に理解されたであらう。ところで、いよいよそれを書く段になると、いろいろ細かい用意や準備が必要になる。これから順次それを説いて行くことにする。

初學者は眞先に寫生するのが有利だと信ずる。人の書いたものなどは眞似をしないで、なるべく自分の直接見たこと、感じたことをそのままに紙の上に寫しとるのである。何でもよい往來を通つてゐるさまよふな人を書いて見るのも好い。田圃へ働きに出てゐる時のことを書いて

寫生文には潑刺とした生き／＼したところがなければならぬ。景色を書けば、實際目に見るやうに、心持を書けば、實際さう感じられるやうに

ても好い。短かくて都合がよいから、どんな忙しい職業に従事してゐる人でも、度々練習的に書いて見ることが出来る。而かも、材料は無盡藏であるから、決して窮するやうなことはない。只、いよいよ書くときと云ふ時にあたつて、どこから書いて好いか、どこ迄で終りにして好いかと云ふことは考へて置かねばならぬが、大抵の見當はつくであらうと思ふ。若し書き出して見て、間違つてゐると氣がつけば、幾度でもやり直せばよからう。

寫生文と云ふことは、ホトトギス派の俳人によつて叫ばれて起つた文體であるが、こゝで云ふ寫生と云ふ意味も別に變りはない。只忠實に景色なり、事柄なり、心持なりを寫すことに苦心をすれば好いのである。けれども、寫生

ならなければうそだ。さうなると寫生文も中々困難だ。しかし、初めのうちは細かに觀察して書くやうになれば好い。

小説の中にもソラなどの唱へた寫實小説と云ふのがある。我國でも最初に小杉天外氏などが試みた。しかし、寫實々と心懸けてゐると、あまり



と云つても、只羅列して行つたばかりでは文章を成さな  
いから、書かうとする事柄を順序よく頭の中で組み立て  
たり、並べたりしてから書き始めるやうにしなければな  
らぬ。寫生文的の書き方をする文章では、現今高濱虚子な  
どがうまい。就いて、参考にするのもよからう。

二 觀察眼を養へ

寫生から入つて行くには——殊に形式の小さい——  
小品文では——何よりも、觀察が大切である。只さへ短か  
い文章で現はさうとするのだから、なるべく細かいところ  
ろ、細かいところに眼をつけて注意しなければならぬ。觀  
察さへよく行き届いて居れば、書く時には餘程、樂になる。  
畫家が寫生するやうな工合には行かないのだから、うつ

に表面的のものに  
なり易い。だから、  
皮相にのみ陥らな  
いやうにしなければ  
ならぬ。

觀察は天分にもよ  
る。併し注意する  
と否なとによつて  
非常な相違が生じ  
てくるのだから、  
初めから天分の如  
何などは問題とし  
ないで、よく／＼  
注意する事が肝心  
である。

かりしてゐると書かねばならぬ。筆のことを忘れて、幾ら  
頭を捻つても思ひ出せないやうなことがよくあるもの  
だ。これは、觀察の不足から來るので、こんな風では、折角書  
きあげても、その文章は間の抜けた虚だらけのこしらへ  
ものになるに違ひない。

觀察と云ふことも、或る程度迄は、その人の天性による  
もので、強ひて觀察しよう／＼と努めなくとも、いつの間  
にかちやんと觀察して、頭に色濃く印象されてゐるやう  
な人もある。また幾ら觀察しようとしても、つまらないこ  
とばかりに氣をつけるやうになつて、少しも、それ以上進  
歩しない人もあるから、どうしても觀察眼の養成が大切  
である。それには、小品文を書く程、都合の好いことはない、

觀察が鋭いと云ふ  
やうなところは、  
殊に小品文にあつ  
ては、冗慢な文句  
を使はずに、一句  
にして生きるやう  
にしなければなら  
ぬ。例へば、「その  
の時、彼は隣室の  
話聲をきかうとし  
て、一生懸命にな  
つた。」と云ふよ



大抵書かうとする材料の範囲が狭いから、それだけのものを飽く迄細密に観察することが出来るからである。

試みに例をあげて見る。

風は朝々の霜にむごたらしい有様になつた桑の葉をかさ／＼音させながら吹いて行く畑中に立つて居た農夫は思はず、くびをちよめた。そして舞立つた木の葉を眺めて居た。

かう云ふ文章があるとする非常に優れた作者の観察がこの中からさう澤山発見されると思はないが、併し、農夫を折角點出しながら、くびを縮めたと云ふ観察がなかつたら、如何にも寒いといふ感じがこれ程に出なかつたであらう。また直ぐその後の舞立つた木の葉を眺めて

りも、その時、彼の身體全體が耳であつた。と云ふ方がすつと緊縮して来て、それに含蓄の多い文句になる。昔に観察が細かいといふのみではなくなる。

ゐた。と云ふ一句がなかつたら、これ程農夫の驚いてゐる姿が鮮やかに讀む者の心に浮び出すことは不可能だつたらうと思はれる。

かう云ふ風に、他人の文章を具さに解剖して研究して見ること、確かに利益のある方法の一つである。

三 強く感じねばならぬ

かうして観察眼を鋭くしなければならぬと云ふことに伴うて起つて来る問題は、感覺性の鋭敏と云ふことである。如何に眼ばかり大きくしてばかりささせたところで、感ずる力が鈍かつたら駄目である。

鈍感な人になると、静寂の中に静寂を味ふことが出来ず、騷擾の中にて騷擾を感ずることの出来ないやうな

ほかんとしてゐては何事も掴めるものぢやない。どうして感ずる力が



のがある。すべてのものに超然として、地上の事は我無關焉と云ふやうな人ならばいざ知らず苟くもものを書かうとするには、感覺性の鋭敏でなければならぬことは、次ぎの一文を見てもよく分るであらう。

日向で横になつて居ると、何だかうつとりして氣が遠くなつて行く。ちよつと頭を上げて四方を見たが、閑然として人の氣合は何にもなかつた。静かな日だこと。——背中で蠅が執拗こく跳廻つて居るので、ついで體を揺振ると塵埃がぶつと立つて五色に光り乍ら上つて行つた。この時ビービーと小禽の聲が澄んだ空氣に轉じて聞えて來た。

これは「静かな日」と題した一文であるが、如何にも静か

強くなくてはいけない。無感覺のしじ事になる。感ぜよ感ぜよ。力を美を真を——かう叫びたい。

だと作者が感じて、静かな日だこと！と強く感じてゐる爲に、うるさい蠅のことや、ぶつと塵埃のたちのぼるのや、最後の小禽の聲などが、さながら、文字の中から起つて耳に響くやうな氣がする。そして「静かな日」と云ふ感じが、一層強められこそすれ、決して弱められないのである。作者の感受性の働いてゐる例としては、この文章などは、或は非常な適例ではないかも知れぬが、これによつて私の説かうとする意味は了解されたことゝ信ずる。

四 印象を重んぜよ

印象を重んずること、大いに必要である。人は見たこと、きいたこと、遇遭したこと、其他何事によらず、暫らく時日が経過してから後に振返つて考へて見ると、自分な

鋭敏なものは音の鋭敏なものの中にも音を感じずる。音の中にも静を感じる。それらは、第六官の働きたとも云へやう。五官のみでは、天地の秘密を感じることは出来ない。天才と云はれるはみな此第六官を持つてゐる。



ら驚くほど、くつきりと鮮やかに、頭腦に印象を留めてゐることを感ずることが屢々ある。それは、その事の全體である場合でもあらう、また一部分だけが、さながら切り離したやうに浮んで来るやうな場合もある。小品文を作るにはさうした印象は大切に育み養うてものにする必要である。印象される程の事は、必ずしもなく不識のうち、その人の心の奥深いところ迄沁み込んで行く力があつたのに違ひない。また、何等か強い感動をその人の魂に刻んだのに違ひない。さうしたことは、屹度文章に書いても、思つたよりは書き易くもあるし、効果も多いこと、思ふそののみならず、その印象を中心にして、その四圍の状態がばやけたやうに薄れてゐても、その印象をしつか

よく「印象的」だ。などと會話の間に使ふことがある。それは例へば、女

りと握つて書き初めて、その前後のこと、或は上下のことに及ぼして行つたならば、ちやんと纏りのある、統一のついたものが出来上り易いのである。いろいろ議論もあることだが、文壇の専門家の間にも盛んに印象批評とか、印象描寫とか云ふことが行はれてゐる。それと同じことである。小品文に於て、その「印象描寫」を試みるのは、實に價値のあることであつて、充分にそれを悟得して、實際に試みられるやうになれば、その人は、最早幼稚なる寫生文の域を脱して、よほど文章道に於て、進歩して来たものと見ねばならない。

の顔の場合なら、別に眼鼻の如何などを仔細に見たつては、なく、只何となくばつとした鮮やかな感じを全體から與へられたと云ふやうなことが多い。これから考へても印象的と云ふことは説明しなければならぬやうな事ではなくて、繪畫からうけるやうな直接に感じられるやうなものである。

宿直に行く私の足跡を、木の葉がバラ／＼と追うて来た、暗い晩だ、見るともなく私の瞳に、バツと赤く闇



が染つたので、それを凝乎と視た「火事かな？ 深澤あたりか知ら？」誰に云ふともなく呟いて見た私の心には微な戦慄が起る。藁仕事に餘念のない老爺に「深澤あたりに火事があるせ」と云ふと、もう雪が来ますか。ね」と云つた私は後を繼がなかつた。

鋭い風が来て釣洋燈の灯をゆるがした。これは「宿直の晩」と題したものだが、その夜の印象を描かうとしたものとして見ると、決して失敗したものではない。思ふにバツと赤く闇が染つたと書いてある光景の印象は一番早く、作者の頭に甦つたに違ひない。それと同じにいろいろ前後のことが、恰も炙り出しの繪が現はれて来るやうに見え出して来て、老爺の云つたことなども、

現今の文學者のうちでは田山花袋氏などは殊に印象描寫を重んじて居られる。就いて學ぶ必要がある。

何でもない言草だが、却つて、その夜の光景や、感じを出す助けとなつて来たとき見る時、印象を的確に掴んで、そして、それを鮮やかに書き現はすのは確かに、文章を學ぶ上に忘れてはならぬことである。

五 中心を掴むこと

物理学上の法則から云つても、しつかりと中心をとつてゐないものは、その存在はぐらつき易い。それとこれとは同じやうに考へられないかも知れないが、文章にも中心をしつかり掴むことは必要である。殊に形式の短小なるべき小品文にあつては、一層然りである。



けれども、只單に中心を掴め！と云つたところで形があつて、そこを指定されるものでないから甚だ漠然としてゐるが、要するに、一つの文章の中で、こゝだと云ふ力の入れどころをしつかり、作者の心に把握して、統一をつかねばならぬと云ふことである。實際統一のない文章ほど、散漫で、間のびがしてゐて、感銘の稀薄なものはない。長い文章ならば、多少そんな缺點を指摘されても、仕方がないとしても、小品文などにそんな缺點があつては、その一篇がまるで駄目なことになつて了ふ。丁度糸目の切れた傘骨がばらばらになつたやうなもので、形だけがあつて、その生命は失はれて了ふことになる。

長いものならば死に角、短かい文章に中心がないの

る。平面的に圖面でも見るやうに叙してあるものもある。立體的に、恰も建築物のやうに出来てゐるものもある。ちよつと見ると、平面的に只單に平叙したものには中心などはないやうに考へられる。併し、それが立派な文章家の手になつたものならば、必ず中心が掴まれて、ちやんと統一がついてゐる筈である。仔細に熟讀玩味して見れば直ぐに解ることである。文字から文字、行かう行へと、聯絡をつけてゐる、眼に見えない繋がりを見出すことが出来る。

左に例として一つの短文を擧げて見る。

◎ 雨の街

木々の青葉も、はら／＼と落葉して、さびしき秋を語

は、龍を畫いて晴を點じないやうな根本的の缺陷が生じて来る。それかと云つて、短いものに、中心を三つも四つもこしらへるのば、散漫にする恐れがある。



る頃、聯隊下の古い堀には、枯蓮の葉がざはくとし  
て居る。

さびしき街の家々の門口には、ダリアの花が秋とい  
ふ、さびしさをしみくと感じた様に咲いて居た。ぶ  
ら／＼とさまよつて居た人々も、いつしか羽衣館へ

集つたらしい。雨は益々はげしくなつた。

旅藝人は、まだ宿もなく、悲哀な唄を歌つて彌勒町の  
方へ行つた。

この文章で見ると、標題が「雨の街」となつてゐるからに  
は、雨の降る街の光景を描かうとして、その中心を捉へ、そ  
れを力を罩めて書かねばならぬ筈であるのに、これはま  
た何と云ふ不注意な、散漫な書き方であらう。初めには寂

しい枯蓮を書き、中頃は、ダリアの咲く街家を書き、そして、  
突然雨を點出してゐるのだが、而かも、何の前觸れもなく、  
出して置きながら、益々はげしくなつて來た。などと書か  
れては、讀む方でも大いにまごつかざるを得ない。そして、  
最後にまたとつてくつつけたやうに旅藝人云々と云ふ  
ことが書き添へてある。かう云ふ文章は中心が掴まれて  
ないばかりでなく、作者の感興が如何に散漫であるかを  
思はざるを得ない。實に支離滅裂である。かう云ふのは、ま  
づいのではない。注意が足りないのである。

若し、作者が眞に雨の降る街のさびしさを、侘びしさを書  
かうとするのだつたら、このまゝの文章を左の如く訂正  
したならば、いくらかましましたらうと思ふ。

書かうとする事をよく纏めてかいら  
ないと中心を外らすやうになる。だ  
から、只漫然と書き初める事は危険  
だ。よく中心點を定めて置かねば  
ならぬ。それでも的を射ようとする  
矢は外れ易いのだから。



はらくと散る木々の落葉が、さびしい秋を語る頃となつた。聯隊下の古い堀を見ると、枯蓮の葉がざはざはと戦いでゐる。只ある家の門口にあるダリアの花も、氣の所爲か、しみくと秋を感じたやうに咲いてゐるやうに思はれた。  
間もなく先刻からの時雨、催ひの空からぼつりく雨を落して来たが、ぶらくとさまよふやうに歩いてゐた人々が、雨を凌ぐためか、羽衣館へ集つた頃には、いよくはげしく降り出した。  
その雨の中を宿も無いらしい旅藝人の一群が、とぼとぼと濡れながら、悲哀な歌を唄ひつゝ、彌勒町の方へ行くのが見られた。

◎朝の田舎路

つめ せきよ かいせ ちやうはたり ちやう ときひとり せい

不完全ではあるが、かうなほせば、多少統一のある文章になるだらうと思ふ。

冷たい清らかな風が、麥畑を吹いてゐる時、一人の青年が、その畦道を急ぎ足で通つてゐた。黒い土も枯れた芝生も、霜の爲に白くなつて、ほんの小やな可愛らしい麥の芽が、それでも、生々として霜の上に頭を抽いてゐる。

間もなく、朝日が昇ると、そこら一帯が銀色に輝いて、朝の景色を一際引つたたせた。からすが一二羽寒さうに飛んで行つた。  
青年は立上つて、そのあたりを美しく見廻した。そし



て、深呼吸を五六回續けて、さて、両手を合せて心から日の出を拜んだ。その青年は自分である。太陽は益々強い光を投げつゝ、昇り初めた。

この文章になると、餘程優れてゐる。題の示すところの朝の田舎道の光景も細かく寫してはないが、よく現はれてゐるし、それに、一人の青年を點出して、その人格を以つて、中心を掴み、全體を統一させてゐるところに、この文の作者の手際が見られると思ふ。最も、これを以て模範とせよと勸めるのではないが、中心を掴むと云ふ事に就いては、教へらるゝ點が少くはなからうと思ふのである。

もう一つ現代の尊敬すべき作家武者小路實篤氏の文章を引いて見やう。これは曾て東京朝日新聞に出た「死」と

云ふ稍長い小説の一説である。

自分達は病院に急いで行つた。自分は病院の勝手はよく知つてゐた。

自分達は嫂の病室についてゐる附添の室に入つた。嫂は不意にうなされてゐる子供のやうな聲を出した。自分はびつくりして嫂のある室の方を見た。病室と附添の室の間にあるガラス窓には白い布がおりてゐた。其處に自分の影が電燈の爲に大入道のやうにうつつてゐた。自分はそれで嫂がうなされたのかと思つて、おどろいて電燈の窓の間から自分の身體をのけた。だが嫂が聲を出したのは、その爲めではなく、床ずれで足が痛んだからだ。その内に静かになつ

こけおどしにいろ  
いるな文字を並べ  
たり、氣取つた文  
章を書いたりする  
のは、もう無駄な  
努力とせられるや  
うになつた。極平  
易な文章で、よく  
書かうとする事が  
表現されてゐるの



た自分達が病室に入つた時には嫂はねてゐた。電燈は白い布でつゝまれてゐた。嫂はうす暗い處にねてゐた。嫂の瘦てゐるのに驚いた。顔色の悪いのに驚いた。之は心配だと思つた。嫂は二月許り何にも食べないと云ふことは知つてゐた。衰弱してゐると云ふことも聞いてゐた。だが想像以上だつた。正視するのが痛々しかつた。嫂は息苦しがつた。室の内も息苦しかつた。自分達は心細い氣がして室を出た。

以上はほんの一節である。併し、どこの一部分だけを抽いて見ても、かう云ふ風に緊張してゐるから、ちよつときりぬいても、決して解れて了ふやうな、統一のないところはない。ぼき／＼した、まるで棒きれを並べたやうな文章、

が、一番よいのである。そして、新しい文章なのである。

句法の簡潔的確と云ふことは率直に物を書くところから来るが、併

でありながら、そして、また、只書かうとすることを只思ひ出したやうにして、並べて行つたやうな書き方でありながら、そこにきり離すことの出来ない聯絡があり、作者の氣分で統一された中心がある。それに、文章が新しい、句法が簡潔である。かくの如きは、一見容易でありながら、學び易からざる文境である。

六 型に支配されぬこと

すべてのことに就いて、型を造るのは必要だ。同時にまた型が出来るのは警戒しなければならぬことだ。その人の見方考へ方によつて、自然に型が出来る。併し、それは、盛られたものが生々してゐる型でなければならぬ。一度こしらへた型で、以て、何によらず、それで見て行かうとす

し、その率直に書くこと云ふことは、しつかりと中心を掴んでゐることになるのである。さう云ふ自信がなければ、率直にびしびし筆が進められない。武者小路氏などは、それがよく行はれてゐると思ふ。



るやうになると、生々した自由な精神が次第に失はれて了ふ心すべきことである。

こゝに説かうとする型と云ふのは、作者がものを書かうとする時に起るところの事物に對する見方や考へ方に甲殻のやうな型が出来るのであつて、文章の形式と云ふことでないのを承知してゐて貫ひたい例へば、花は美しいものだ、火は赤いものだ、と云ふやうな單純な概念で物を見たり、落第した生徒は怠惰者だ、とか、顔が蒼いのは肺病だ、とか云ふ風に、これ迄に何かで得た觀念によつて、物事を斷定することである。こんな風に考へて行くと、實に單調になつて、少しも文章に生命がなくなつて了ふ作者は如何なる場合でも、仔細に觀察したり、考へたりしな

型によつて物事を見たり考へたりする人は、丁度色盲のやうなものである。黒を赤と間違つても平氣である。しかし、善と間違へるやうになつては大變だ。恐ろしいことが起つて来る。

いで、ちよつと見て、直ぐに、型に箝めて了ふやうになる。さうすることは極めて、容易な道だから、初めのうちに用心しいくやつてゐても、いつの間にか、型に囚はれてゐるやうになる。病膏肓に入つては、どうにも、破れることも、脱することもある。出来ないやうになるから、餘程注意をして、型に捉へられないやうに心懸けねばならぬ。火は赤いものと思つて、頭から定めないうて、蒼い時もあり、白く見える時もあるのだから、なるべく、眞實にその時感じた儘を書くやうにしたならば、そこに生々したものが描き出されて来るのである。

私はある文學者からかう云ふ話をきいた事がある。参考になる話だから、序でにちよつと書いて置かうと思ふ。



或る年の夏、その人が海岸へ避暑に行つた。その時、地方から來てゐる青年も書生として連れて行かれた。毎日海へ入つたり、散歩をしたりした。ある日、書生がふと、砂が青く見えますね。と云つた。すると、文學者は、砂が青いなんてことがあるものかね。と何氣なく云つた。併し、後からよくよく考へて見ると、自分の方が間違つてゐることを覺つた。砂は白いものだ。と云ふ。既成觀念に支配されてゐるために、その文學者は、その時もさうとばかり思つて、書生の言を否定したのであつたが、その時は矢張、砂が青く見えたのであつた。書生の眼の方が鋭敏に、よく砂の色を見たのである。かう云つた風に、すべての事を型によつて見られるやうになると、その眞を傳ふることは困難になる。一

型に入つた人の心は封ぜられたも同様である。絶えず同じやうな考へ方ばかりしてゐるやうに見えて、生き生きとした融通のきくところが失は

見、間違つてゐるやうに見えても、矢張、眞實は眞實なのだ。況んや、紛糾錯雜せる人生の諸相を描かうとするには、作者自身が生々とした自由な心持で、事物に對して行かねば到底その眞相は寫せるものでないのである。また、初學者の陥り易い弊害としては、自分の型に捉はれること、ではなくて、人の型に捉へられることである。例へば、自分が見た風景をちよつとスケッチしようと思ふ場合に、曾て讀んだ先輩なり知人なりの文章のうまいと思つてゐるところが頭に浮んで來て、ついうつかり、それと同じやうに書いて行つて、肝心の自分の書かうとしてゐる風景とは全然別のものになつて了ふやうなことがある。これなどは、自分の學んだ技巧を應用しようとしな

れて了ふ。諸君は自らこの封ぜられた心の持主になつてはいけない。封ぜられた心の住家は牢獄に等しい。



いで、却つて、その型に魅惑せられて、その形骸だけを借りて来て、生命を吹き込むことを忘れたのである。最も、全然、型があつてはならぬと云ふのではない。誰でも、次第に、一家の風格を備へて来て、一見してこれは誰の文章だと解る程、鮮明に型が出来るものだが、これ等は寧ろ、その人の特色とも云ふべきものであつて、その人の書いたものには、一つ一つ内容の相違によつて、異つた書き方がしてあることが分るであらう。

勿論、自分が如何に型に捉へられてゐなくとも、それを表現する技巧——文章に對する智識や、驅使など——に於て、幼稚であつたならば、能きないことかも知れないが、併し、心懸さへよかつたならば、技巧などは自然に追々と

他人の作品を讀むにしてもその型を見るにとりめずして、その内容を見ようとする人がなければならぬ。それから、内容に伴ふ表現の形式を見らなければならぬ。

進歩して来るものである。要するに初學者は幼稚でも好い。なるべく純白な子供のやうな心持になつて、すべての事物に對さなければならぬのである。

七 模倣と獨創

よく初學者は模倣から初まるものだと言ふ。なるほど、人のやつてゐることを摸し倣ふと云ふことは、人間の先天的に以てゐる本能である。幼兒がだん／＼大きくなり、發達しゆくのを見てゐると、すべて、模倣によつてさうなつて行くやうにさへ思はれる。

これと同じやうに、文章を學ぶにも模倣は餘儀ないことだ。否、或る程度迄は必要なことだ。併し、それは文字使



ひや、材料の取扱ひ方や、見方などを研究する上の模倣であつて、その内容となるべきものは、飽く迄も自己に立脚して、眞面目に、誠實に、その本心を披瀝するやうに心懸けねばならぬ。さうすると、如何に初歩の人でも、幼稚な程度にある人でも、必らず、そこに、自分の持つてゐるものが、現はれて来るに違ひない。それが即ち獨創である。文章の最高の意義はこの獨創を出すことにある。

模倣なども、これを不知不識のうちに行ふのは、初學者の陥り易いことだから、氣付けば直ぐに改めると云ふ誠意さへあれば、さして咎むべきではないかも知れぬが、これを故意にやる人がある。花袋氏の文章を読めば、直ぐにそれを眞似やうとする。藤村氏の文章を読めば、直ぐまた

如何なる人でも個性を以てゐる。個性があれば獨創がある。しかし、個性を現はすことも、さう早速にはいかない。初めのうちはかくれてゐるもので、それを現はすには、無意識の

倣はうとする。而かも、長所のみを認めて、自分のものにして、ようとでもするならば、格別だが、短所、缺點、癖などのみを眞似て、得々たるに至つては、實に憫笑すべきである。かくの如き模倣は無益な努力である。他人の殻を踏襲するのみで、自己の生命に得るところは何にもない。而かも、それがよく、旨く行つたところで、虎を描いて猫に類する位のものである。

併し、獨創を出すに云ふことはむづかしいことである。第一、獨創的なものを持つてゐるか、どうか分らない。よし、自分の持つてゐるものを出さうとするにしても、中々難かしいことである。自分ながら持つてゐるものを探しあて、それをかきとめ、鮮やかに出すことは更に困難である。

うちに、人によつて引き出され、また自分が現はしてゆくやうになる。が、いつまでも樂な人眞似ばかりやつてゐるは獨創は心の中に惰眠を食つてゐて、いつまでも頭を擡げないのみか、遂には習慣になつて了ふ恐れがある。このことをよく注意しなければならぬ。



併し、初めのうちは、「獨創」と云ふことを、さう大袈裟に難かしく考へる必要はなからう。只正直に、眞實に自分の見たことなり、心に映つたりしたことを忠實に書けばよい。そこから、僅かながらも微かながらも獨創的なものが生れて来るのである。それが、だん／＼次第に生長し、複雑になり、生々したものになつて来るのである。

初めのうちは、折角、自分の持つてゐるものでも、それが、どれほどの意義あり、價値があるか解らないので、書かうとする際になつて、公然と發表することに氣おくれがしたり、恥かしくなつたりする。そのために、自分のものをひっこめて了つて、他人のものを借りて来るやうなことをする。それでは、何にもならない。飽く迄、自己に立脚し、自己

獨創々々と云つたところで、無暗に變つた突拍子もない事を書くのでは、ない。飽く迄も眞實性を背景に持つてゐるものでなければならぬ。

を表現するところに、文章の第一義的の意味があるのだから、たとひ、どんなつまらないことでも、好いから、正直に自分のものを、出すやうにしなければならぬ。用心深く注意深くするのは、無論大切なことではあるが、自分の持つてゐるものは、大膽に出して、他の批評をうけようとすゝる勇氣がなければ、進歩は遅々として、いつまでも、同じところ止まつてゐるやうな、みぢめさを經驗しなければならぬのである。

### 八 頭 中 で 練 る 必 要

見たまゝ、考へ、浮んだまゝ、心に閃くまゝ、を直ぐに筆を執つて書いても、好いものが出来ないと云へないが、併し、初步の人は、出来るだけ、充分の準備と用意をしてか



ら、紙に向ふやうにすることも肝要である。既にその道に於て、苦勞を積み、習練を経てゐる人でも、さう何物でも滯なく書き出せるものでない。況んや、初歩の者はいらざる苦心までしなければならぬ。だから、書かうとすることを出来るだけ、頭の中で練り、鍛へてから書くやうにしなければならぬ。

これは、つまり、麴が醱酵するのを待つて出来るやうなものである。また、果物がよく熟してから枝を離れるやうなものである。よく醱酵しない麴は役に立たない。半熟の果物は食ふに堪へない。それと同じやうに、文章も半醱酵、半熟のものではいけないから、なるべくなら、充實したものと考へて持たなければならぬ。更に言葉を換へ

文章は單に作者が材料を紹介する仲介者たる役目を果たすのみが責任ではない。材料を自分のうちへ入れて、そして、それを充分育て、生み出すのがある。生みの苦しみを經なければ、そこに立派な文章が現はれるものではないのである。

て云へば、書かうとするものを暫らく作者の頭の中に置いて、生み出す迄に育てなければならぬと云ふことになるのだ。中には大した障りもなく生れるものもある。あらうが、併し、月足らずで無理に押し出すやうなことをしてはならないと云ふのである。

短かい小品文だからと云つて、無暗矢鱈に書きなぐつたりしてゐると、かうした月足らずが澤山生れるのである。最も日記文とか、書簡文とかの實用を主としたものは、例外と見なければならぬ。

現代の小説家の中でも新進作家として、最も文章か旨いとの稱ある文學士芥川龍之介氏はかう云ふことを云つてゐる。左に掲げて見る。



材料があつても、自分がその材料の中へはひれなければ、——材料と自分の心もちとが、びつたり一つにならなければ、小説は書けない。無理に書けば、支離滅裂なものが出来上る。僕はあせつて何度もさう云ふ。莫迦な目に遇つた唯弱るのは、その一つになる時が、何時来るかわからない事である。材料を手に入れて直ぐさうなる事もあるし、材料を持つてゐる事を殆ど忘れた時分になつて、やつと、さうなる事もある。飯を食つてゐる時でも、本を讀んでゐる時でも、後架にある時でもかまはない。その時は、眼の先が明くなつたやうな心もちがする。

然と醜醉するのを待つ時の事である。實に玩味すべき言葉である。

更にまたかう云つてゐる。

書いてゐる時の心もちを云ふと、拵へてゐると云ふ氣より、育ててゐると云ふ氣がする。人間でも事件でも、その本来の動き方はたつた一つしかない。その一つしかないものをそれからそれへと見つけながら書いて行くと云ふ氣がする。一つそれを見つけ損ふと、もうそれより先へはすゝまれない。すゝめば必ず無理が出来る。だから、始終注意を張り詰めてゐなければならぬ。はりつめてゐても、僕などは、まだ見のがしてしまふ。それが兎に角苦しい。

芥川氏の言葉を藉りるまでもなく、文章を書くのには無理をするのが一番悪い。筆が進まなくなればまた感興の湧いて来るまで待つが好い。その待つてゐる間に生み出すものが準備されるのである。



この言葉によつて見ても、芥川氏の如き名手でも、これ程苦心をするかと云ふ事が分ると同時に、頭の中で――書く前に於ける想を練り、材料を渾熟させることが如何に重大であるかが了解されるであらうと思ふ。

### 第四章 文章上の諸注意

#### 一 字句を簡潔にすること

小品文と云ふもの、それが既に短いことを原則とするのだから、それを構成する字句が簡潔でなければならぬことは分りきつてゐる。理窟ではよく分つてゐるが、いざ書く場合になると、さて、中々難しいものだ。

一つのことを形容するにも、長い文章だといろ／＼なありつたけの知つた文句や、熟語を引つ張り出して来て、並べたてるやうなことも出来るが、小品文はさうは行かない。なるべく、妥當な適切な文字を以て来て、その他のものは省くやうにしなければならぬ。さうしないと、無暗

簡潔にすること  
は、初めから、それ  
に都合の好い、單  
純な事柄を凝つて



にだら／＼と長くなつて了つて、終ひには思つてゐたこ  
との半分も書けないで、結末の方を尻端折にして了つて、  
充分書けないばかりでなく、全體の上から見、一篇の均  
衡がとれず、變な鶴式のものになつて了ふ。

何と云つても、簡潔にするに云ふことは、文章を書く上  
の一つの秘密である。殊に小品文に於て然りの感が深い。  
そして、上手なものほど、この事をよく飲み込んでゐるや  
うである。現代の文學者の中でも、森鷗外、島崎藤村氏の如  
き大家は、如何にもよく、簡潔々々にと努力してゐられる  
やうに思ふ。或はさう意識して書くのではなくて、自然さ  
うした文章の極致を會得したのか、それはどちらでも好  
い。が兎に角、初學者の讀んで以て模範としなければなら

かゝれと云ふので  
はない。複雑な事  
を單純にするとい  
ふに意義があるの  
である。

ぬ文章だと思ふ。

それから、文章を簡潔にする方法を學ぶには、極めて短  
小なる形式によつて、可なり複雑なことを現はさうとす  
る俳句を讀んで味うて見るとか、または簡潔素樸を旨と  
する俳文を研究して見るとかするのにも有益なことであ  
る。この事は既に多くのの人々によつて、從來、屢々説かれた  
ことであるし、また、さうして來たものだが、現代の人は、多  
くさうした種類の文章に親しまない傾向がある。却つて、  
詳細に描く外國文學の翻譯などの文章によつて、新意に  
富んだ書き方を學ぼうとするの結果、兎角、長いものにな  
り易い。これも強ち一概に斥ける譯にも行かないが、併し、  
俳文だとか、漢文などから改めて學び返す必要があるこ

洋文脈をとり入れ  
ることは冗漫にす  
るのではない。西  
洋の文章必ずしも  
長たらしいので  
なく、これを日本  
の文字にかへる時  
に長くなるのであ  
る。だから翻譯文  
などを味ふ時に  
も、それを注意し  
なければならぬ。



とを注意して置きたい。只古臭いとのみ頭からきめてか  
かつて、漢文のさうした特長のあることを閑却してある  
人が多いが、新らしい眼を以て見れば、多くの利益を獲得  
することは疑ひないことである。一句によつて、驚くばか  
り簡潔に云ひ現はすことの出来る場合が非常に多いの  
である。

少しく例を示して説明しなければならぬが、こゝに夕  
日の光景を描くとする。西に傾いた夕日が赤々と血のや  
うな光を暮雲の間から投げた。などと書いては、さつぱり  
駄目だ。單に長くなつたばかりでなく、同じ意味を含んだ  
文字が二重にも三重にも使用されてゐる。西に傾いたと  
云へば、特に夕日と断わらなくとも好いし、夕日と云ふか

らには暮雲と書くまでもない。また血のやうなと形容す  
れば、赤々と云ふ文字も些か重複の嫌ひがある。かう云ふ  
風になるべく、簡約に簡約にとねらつて行かねばならぬ。  
また、人の心持を述べるにしても、すつと以前からのこ  
とだ。彼は一度は多くの書籍を読み、師に就いて、文學上の  
研究をしたと思つてゐた。それが、今漸く實現されたの  
で、彼の歡びは實に譬へやうもない程であつた。と、書けば  
随分冗漫なものになる。この調子で、書いて行けば、ちよつ  
とした事でも原稿紙の一枚や二枚は瞬く間に書き潰さ  
れて了ふのである。

で、こゝに、出来るだけ約めて見ると、書を読み、師に就き  
文學を知らうとする以前からの希望のやつと達しられ

初學者が文章を簡  
潔にするには、先  
づ思ふ通りに書い  
ておいて、後から、  
それをなるべく簡  
約にするやう直し  
たゆくのがよい。  
そして、次第に研  
究を積んで、自然  
と簡潔にする方法  
をのみ込むやうに  
するのが好い。



た彼の歎びは譬へやうもない程であつた」と書けば、餘程よくなつて来る。

かう考へて来ると、簡潔にするには、凡そ左の條件を大切に守らねばならぬことになる。

第一 出来得る限り無駄な文字を使はぬやうにすること。

第二 内容の充實した言葉を選択すること。これは、書くべき事物の中心を穿ち擗んだものである。

第三 暗示の多い言葉を使つて、全體の緊縮を計ること。

第四 單に真正直に、正面から忠實に書き現はさうとばかりせず、側面から書き、或は比喩を生かすこと

である。

以上の中でも、「暗示」や「比喩」については後に詳しく説くから、茲では省いて置くが、これ等の條件を頭に置いて加れば、先づ間違ひはないと思ふ。それにつけても、文章に對する敏感なこと、知識を養ふことが、非常に重要なことになつて来る。

これは次節に譲ることにしよう。

### 二 文字の選擇に就いて

文章は文字によらねば、現はすことの出来ないといふ制約があるからには、如何にかして、よりよき結果を得ようとして、文字の選擇に腐心することは、文章家の常である。彫蟲の末技だなどといつて罵られる文章は、只文字の

文字の用ひ方が拙劣である、作者が何を書かうとしたのか、のみ込めないやうなことが少なくない。随分熱心に書いてあるなと云ふことは理解



羅列のみがあつて、そこに何等作者の生きた精神の働いてゐないを云ふのであるが、大體文章と云ふのは文字があつて生れたものでなく、人があり、そして、何等かの表現しようとするものがあつて、初めて文字が造られたのであるから、文字は客である手段である。そして、作者に驅使されねばならぬ性質のものである。それが却つて文字の奴隸となり、驅使されるやうになつては駄目である。如何なる場合でも、作者はよき文字を選び、自在に驅使するやうに努力しなければならぬ。

されても、内容と文字とがびつたり合つてゐない爲にすべてがちぐはぐになるのである。

文字はその人の使ひ方如何によつて生きたり死んだりする。また、新らしくもなり、古くもなるものだから、只一概に、これは、死文字だとか、古いとか云ひ捨て、了ふこ

とは出来ない併し、抽象的になつた文字は、なるべく避けて、生々とした具體的な文字を使ふやうにしなければならぬ。然らば、抽象的の文字とはどんなものを指して云ふかと問ふであらうが、それは、思ふ儘にならぬ人生を語るに、直ぐ「月に叢雲花に嵐」と云つたり、美人を形容すると、どんな美人でも、妖嬈媚として花の如し、などの類であつて、實に古くから幾度も繰返され、書き古された文字のことである。曾ては、それ等も何人かによつて始めて用ひられた時には、實に新しい、生々とした形容詞として、珍重されたかも知れないが、今人がこれを繰返すと、何等の新らしい感じも得られない。徒らに類型的な鈍い感じをうけるのみで、心に響いて來ることが少い。

抽象的な文字を用ひて書くのは非常に容易なことである。少し、注意して、人の書いたものや、古人の書いたものを讀んで、記憶してさへ居れば立ちどころに一つの文章位は書ける。その代り、その文章は作者との關係の浅いものになり、文章は死文字となつて了ふのである。



文字に對する考へも、専門家になると、餘程鋭敏になつて來ると見えて、西洋の或る詩人などは、文字によつて色色な音を連想し、感ずるやうになつたと云ふ位である。我國の文學者などにも、それに類したやうな感想を發表した人が可なりある。鈴木三重吉氏は殆ど病的な位文字に對する好惡があつて、漢字のいやなのはどうしても思つたやうな感じが出ないと云つて、假名を使つたり、その他、随分むづかしい選擇がせられる様子である。また芥川龍之介氏は、ある書物に、それから文章にも、可成くだらなく、神經をなやませる。これは僕には時と場合でとても使へない語があつたり、句の調子が妙に氣になつたりするのだから、仕方がない。たとへば柳原と云ふ町の名前でも、一

面にそこいらが縁になるやうな氣がして、その縁に折合ふやうな外の色の語がない以上、どうしても使ふ氣にはなれない。これだけは、實際崇られたと云ふ氣がしてゐる。と書いてゐる氏自身が云つてゐるやうに、實際崇られたの、かも知れない。併し、これ程迄に神經的になり、細心になると云ふことは、畢竟文章に熱心だからである。文字のことを云つた序でを以て一言して置きたいことがある。それは、辭句と辭句との組合せを注意することである。多く文章の巧拙と云ふことは、さうした點に顯はれて來るもので、下手な人が書く時、辭句と辭句が離れ離れになつてゐたり、少しも含蓄が無かつたりして、生き生きしたところ、精采と云ふやうなものが失せて了ふところ

文字の選擇と云ふことは、やがて、辭句の選擇と云ふことになり、好い辭句さへ見つかれば、あとはもう、大丈夫だ。辭句から辭句を追つて、作者の氣分がそれにつれて進んで行くので、そこに有機的な血の通つたものが出来る。



ろが上手な人になると、そこに有機的な繋がりが生じ、加之無限の色彩やら含蓄やらが出て来て、文章の妙味がそこに味は、れるやうな氣がするものである。文字を選択することは、やがて辭句を選ぶことになり、辭句に注意することは、その間の組合せを苦心することになるのだが、どうかすると、一が注意されると、二が閑却され易いのが、初學者の弱點であり、弊害であるから、くれぐれも注意しなければならぬことである。これも、要するにその人の心懸と練習に俟つより外に方法は無い。

三 情趣を出す必要

書くべき材料によつては情趣を出すといふことは左程迄重要視する必要のない場合もある。しかし、一體に情

趣の豊かに出てゐるものは、しつとりと潤があつて懐しい氣持のするものである。讀む者の心にも柔かく沁み込んで来る。決して、文章ががさ／＼した干乾びたものとはならない。

情趣を出すといふことは、氣分を現はすのと同じこと

だ。  
氣分とか、心持とか云ふものは、作者その人にあるのだから、こゝでは、特にその事に就いて語るのを避けたい。只、氣分とか、心持を出す技巧上の研究をして見たいと思ふ。時と場合により、材料そのもの、相違により、その表現法は異つて来るのだから、概括的に云ふことは出来ないが、どうも、氣分を出して、文章に情趣を添へると云ふ書き

文章を書くには、いつまでも若やいだ潤ひのある心持でゐなければならぬ。さうした人にはいつも何物にふれても新しい氣分が起る。氣分が常に新らしく、生きてゐると云ふことは、人間として、幸福なことである。



方は、乾燥な説明的叙寫では、うまく行かないやうである。限られた意味しか傳へないやうな文字のみを便りにしないので、その文字の雰圍氣に、作者の氣分をふうはりと漂はすやうな苦心が要る。それには、勢ひ、暗示的とか、印象的と云つたやうな書き方が、必要になつて來るだらうが、なるべく、繊細に氣分の動き方や、陰影を捉へて、それを直ぐに讀者の心に顫動するやうに入つて行かせる努力をしなければならぬ。小品文にあつては、そんな、生温い漠然としたものを書き現はさうとするのは、甚だ不利な方法のやうにも感じられるが、事物の狀態をそのまま、寫實的に書かすに、作者の氣分を主として、それを透して、事物の本體を感じ

させやうとする時は、この方法は非常に肝心なものになつて來るのである。また、さうした全體的からの意味でなく、文章の部分部分に、ちよつと情趣を添へるやうな書き方をして見せて、非常に引き立つて見えるやうな場合が多いから、この事も充分研究して置かねばならぬ。

◎月光

さつき迄お宮の縁で遊んでゐた皆なの影は見えない。月は黒い森の上から、銀のやうな光を浴せた。故郷を思つてゐる私の眼には、涙の露が光つてゐた。お宮の下で、蛙が鳴くから歸ろ……。あ！あれは信ちやんの聲だ。私も石段を駆け下りた。

情趣を出すに云ふやうなことは、極めて微妙な働きである。如何に文章を苦心し、推敲しても、必ず出ると云ふ性質のものではない。文字以外の苦心が必要で



この一文などは、實によく纏つてゐると思ふ。材料が奇抜だと云ふのでもない。文字の使ひ方に特異な點があるのでもない。併し兎に角、ちやんと中心があつて、印象的で、それでゐて、文字と文字との間に何とも云へない淡いなつかしい情趣が漲つてゐるではないか。多くの説明を費やさずして、鮮やかにその情景を浮き立たせ、その上、いゝんなことを思はせられるやうに出来てゐる。森の上から月が現はれた頃は、もう縁で遊んでゐた子供達は去つて了つた。只ひとり故郷のことを沁みこみ、思ひ續けてゐたのが、盆のやうな大きな月がぬつと出たので、ふとはつきりした現實の意識に返る。あたりはひつそりと静まり返つてゐる。さつきまで遊んでゐた子供達はもう歸つたの

ある。これから考へても文章を書くのは機械的のものでないことが分るであらう。

か知らなるとぼんやり月を眺めてゐると、聲が聞えた。それはあの可愛らしい少女の聲である。そこで、自分も急にそこにあることがたへがたく淋しくなつて、追ひ立てられるやうにして、石段を駆け下りると云ふのである。さうした可なり複雑なことが、僅々數行の文字によつて現はれて、限りなき情趣が流れてゐる。文章は須らく、かう云ふ風に行かなくてはならない。

◎春の夜

しつとりした春の夜だ。ランプの光にもうるほひがある。室内の空氣は仄白くちいとしてゐる。薔薇が吐く吐息が、淀んだ甘い空氣に漂うて、私はその細かい香の波の中へ捲き込まれた。

仄白



私はランプの淡い光線を浴びて私の生命全體が瞳の中なかに溶け込んで、眼に見ゆるすべてのものが皆青白くなつて消えてしまつたやうに感じた。

しつとりとして春の夜の氣分を描かうとしたもので、何より情趣に富んだ文章である。只最後の私はランプのと云ふ以下は少し誇張に過ぎたばかりでなく、讀者に的確な印象を彫み込むだけの力がないと思ふ。今少し、表現に苦心を経なければならぬ必要がある。それにかうした氣分に重きを置く書き方は、案外樂に自由に自分の思つたやうに書き得る徳があるから、不知不識のうち、型に入る恐れがある。終ひには、すべての物に向つての感じ方そのものすら型が出来て、生き／＼したところを失ふや

眼に見えない波動——さうしたものを捉へる必要がある。例へば人間の感情が動いても、それが元の平靜な状態に還る迄には、いくらかの間がかかるといふ。その間の状態は實に微妙に動いてゐる。さうしたものを文字の間に織り込んで行くやうにしなければならぬ。

うになり易い警戒すべきことである。

情趣とか氣分などを書く上に獨特の手腕を持つてゐる人には鈴木三重吉、水野葉舟、小川未明、秋田雨雀の諸氏がある。新らしい人の中なかでも豊島與志雄氏などは優れた才能を以てゐるやうに思ふ。機會あらば、一讀して見ると好いと思ふ。

◎夜のほひ

夕食時なので一しきりあたりが静まつた何だか曖

られるやうな夜である。  
生垣の向ふからは隣の野風呂の匂ひがほかり、ほかり匂つて来る脂強い嫌な香だと思ふと、どこか女の髪に顔をうづめてゐる様に強ひて、嗅ぎしめられる



やうにも匂ふ。

と、びちやくくと、肉附の好い肘で水を打つてゐるやうな快い音がして来た。

月はまだ出ないが、ほんのり空が明るい。

この一文などは情趣的といはんには餘りに人間臭い。こんなのは官能描寫とでも云ふべきものであつて、西洋の近代文學の影響をうけた後の我が文壇にも官能の開放と云ふやうなことが叫ばれて、かう云ふ風にさながら獸のやうに官能の鋭敏なことが尊ばれた。つまり、作者の實感を尊ぶのである。夜のにほひにはさうしたものが、少ししつこい程書かれてゐる。作者の感覚と、その情景とがよく綯はれ、交りあつて、一種の情調をよく現はしてゐる。

老人になれば若やいた感情も、鋭い官能の働さも、すべてが鈍くなつて了ふやうに思ふ人がある。併し、藝術家にあつては決してそんなことはない筈である。彼のトルストイの作品を見れば直ぐ分かる。とても八十の老人が書いたものとは思へないやうな若やかなみづみづしい書きやうをしたものがある。

と云ふ點に於ては、確かに成功してゐると見るべきである。

#### 四 比喻から暗示へ

修辭學と云ふ専門的な學問の上から研究してかゝれば、比喻と云ふことも種類があつて、いろ／＼むづかしいことになるかも知れないが、爰ではそんなにまでする必要はあるまい。實際の上には何の役にも立たぬことを彼是と論じ合つたところで仕方がない。要は只、比喻がどんなものであるかをよく呑み込んで、少しでも文章を書く上に役立つやうに、效果あらしめるやうにすれば、能事了れりである。何事も實行だ！  
一言にして盡せば、比喻と云ふことは、自分の云ひ現は

「修辭學」の方では、隱喩とか直喩とか、と云つた風にいろいろ系統的に分類されて研究してあるから、一讀の必要はある。併しさうした學問に捉はれないやうにしなければならぬ。



さうとすることを、よりよく現はす爲めに、他の物を借りて來ることである。だから、必ずしも、比喩を使つた方がよいと自信がある時でなければ、用ひはてならない。却つて悪くする爲に何を好きこのんで比喩を借りて來る必要があらう。だから、かうした方が、屹度好いと云ふことを豫想した場合でなければならぬ。

巧みに比喩を用ひると、冗漫の弊を避け、忠實に描寫するよりも、一層効果を多くすることが出来るから、小品文には是非用ひなくてはならぬものだ。これを、ある極めて一大部分の形容にも用ひる。譬へば海、の動搖するやうに、私の心はいつまでも靜穩に返らない。と云ふのも、「海」と云ふものを借りて來た比喩とも云へやう。或はまた、僕の心

比喩を用ひると、著しく文章の無味單調を救ひ、平板な弊を矯めることが出来る。そして、また文章に一種の魅力を加へるに役立つものである。

は堅固である。浮きつ沈みつしながらも、しつかりと流れゆく道をつき進んで行つたなら、いつか人生の彼岸に達することが出來やうと思ふからだ。などの人生の行路を水の流れに押しながされるものに譬へたところに比喩がある。同じ比喩でも、これ迄に使ひ古されたものは、それほど効果はないから、なるべく、新しい獨創的なものを採し出さねばならない。

以上に挙げた簡單な例によつて考へても分る通り、比喩が抒情、感情、議論に傾いたものに多く用ひられるのは、これ自然の道理である。この事も一應承知して置く必要がある。

◎無聲の夜



蒼褪めた夜が襲つて来た。  
 彼方此方の蔭に死に瀕してゐる人の唇から漏れ出  
 るやうな哀調を帯びた工夫等の疲れた歌が掘出さ  
 れる様に聞えたが、併し、遠慮のない風は降り積る雪  
 を吹き巻くりつゝ、戯れて意地悪く嘲けるやうに疲  
 れた歌をばら／＼に千断つて四方に投げ散らして  
 しまつた。  
 黒い無聲の夜の暗の内には、何物も見出されない。唯  
 唯曠野が自身で怒鳴つてゐるやうに思はれるのみ  
 だ……。

この文章の如きは、部分々に比喩が用ひられてゐる  
 ばかりでなく、文全體がすべて比喩から成り立つてゐる

比喩も下品になると、才氣を喜んでゐるやうに見えたり、洒落を云つてゐるやうに見えたりするものだから、さう云ふことのないやうにしなければならぬ。

やうなものだから、寧ろ、暗示に富んだ文章だとか象徴的  
 の書き方がしてあるとか云ふべきであらうが、爰には比  
 喩の例——而かも、小部分の一句一節ではなく、長い文句  
 の中に用ひてある例としてひいて見たのである。無聲の  
 夜」と云ふ題が既に暗示的でもあり、象徴的でもある。この  
 文章が何を現はさうとしたものか。またどれだけの成功  
 を得たものかは、今問ふべき問題ではないが、比喩によつ  
 て、自分の気分なり、心持を現はすには、随分便利である。力  
 強く人の心に響かせることが出来るのを感得されるで  
 あらう。それに、比喩の世界は自由な點がある。作者の想像  
 力によつて、奔放に自在に種々なものを借りて来て、道具  
 に使ひ、手段に供することが出来るからである。而かも、力



量が生じて来るにつれて、それが單なる借り物や道具ではなくて、立派に生きた力のある本物になるのである。だから、必要もないのに無理に使はうとするのは不可いが、確かに使つても好いと信じられる場合には、比喻を用ひて、文章を生かすやうにしたら好からう。  
やがて、それが、充分に習練が積んで、骨が飲み込めるやうになれば、暗示的に物を現はさうとするところに、一歩を進めるのが、自然の徑路である。説明の煩瑣と乾燥とを避けて、自分の心に映つたものを、直接に人の心に傳へやうとするのである。さうする事によつて、暗示的な書き方が生じて来る。それは、明らかに説かないで、その實體を生きた姿のまま、感じさせることが出来るのである。言葉

「暗示的に書く」とも、いろ／＼な場合に必要だが、小品文などにあつては、露骨に書いて了つては、何の餘情もなく、云ふやうな時に、ちよつと暗示的な筆法を用ひると、大變に文章に含蓄物が出来、床しいやうなところが出来る。来るものである。

で説くより以外に、その全體が映るのである。必らずしも、比喻のやうに全然異つたものを以て来て、代理させやうと云ふのでなくて、その本體を如何に簡約に的確に現はすべきかと云ふのであるから、中々に困難な問題である。

◎落日の街

私は女の顔を見た時ぞつとした。死人の様な眞青な悲しい顔が凝つと私を睨んで居た。  
はつとして眼を外らすと、濁つた血塊の様な紫の太陽が狂ひながら落ちて行く。その時眼に映つた悲しい、惨ましい死のやうな色の街——弱い私の心はもう二度とこの光景を見る事が出来なかつた。紫の太陽、青い街、死の様な天地——青色の悲しい眼鏡、その

「象徴」と云ふ事は詩の方では盛んに用ひられ、随分議論もあるやうである。「青い花」と云つて、「死」を思はせるやうな書き方も象徴と云つたものだが、それはもう古い。只普通のことを書いてゐながら、それが象徴になつてゐるや



下に病みたゞれたる赤い眼——私は落日の街に立

うでなければ駄目だ。現今詩の方で云つてゐるのは、草でも好い。花でも好い。それを描いて、そこに宇宙の生命——神の存在と云つたやうな根本的のものを現はすことを云つてゐるやうである。

つて、かなしくかなしく眼を閉ぢた。  
この文などは、随分誇張した書き方である。刺激の強い文字はかりを集めて、意味を強めやうとしてゐるところに、多少嫌な點がないではない。併し、今暫らく、これ等の缺點を忍ぶとして、改めて、この文章を見ると、随分暗示的な書き方がしてあると思ふ。落日の街を描きながら、何等の説明をも用ひずして、自分の病的な心理状態を暗示的に示さうとしたものと見る時、初めて、この文の存在の意義が生じて來るのである。そして、また何事か異變が起らうとする前兆のやうな光景が描き出されてゐるともとれやう。前にあげた「無聲の聲」の一文なども、同じ系統に屬す

るものである。

併し、誤解してはいけない。「暗示」とは凡てかうした象徴的なむづかしい事かと云ふに決してさうではないのである。もつともつと容易に解釋が出来る。例へば、「そこら一面に咲いてゐる花が、あたりを明るくした」と云へば、夜ならば白であらうし、日中ならば赤い燃え立つやうな花の色であることが、直ぐうなづけやうに思ふ。これなどは、明るくした」と云ふ一句によつて、花の色を暗示したことになる。かう云つた風に、花の色が赤いなどと、當然のことを書くにといめないで、また形式のみにといめないで、そこに眼に見えるやうに感じさせるところに、「暗示」の力と生命がある。只そればかりでなく、文章に餘韻餘情と云つた



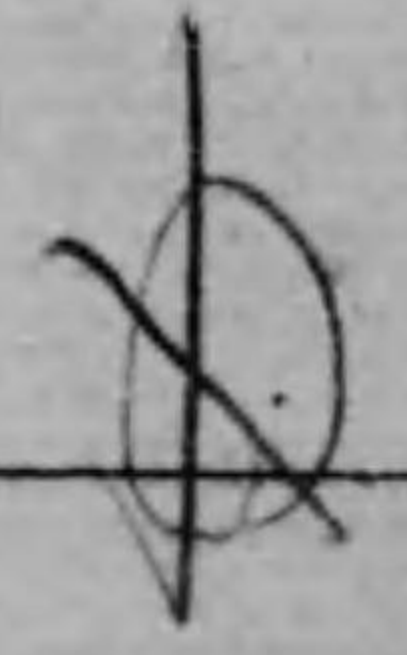
やうなものをも多分に帯びさせる事に力があると思ふ。島崎藤村氏や、正宗白鳥氏の文章を見ると、暗示的な描寫がさらに發見される。少しも氣分や、心持を書かうとしない場合の本當の現實描寫の場合でも、暗示的なところが多い。人が喧嘩をして罵つたら、なぐつたり、組みついたりするやうな光景を描く時でも、決して、その儘を、その通りには書かない。只その通りに書いて了つては、説明的で、輪廓的で、少しも實感となつて現はれて來ない。ところが、「茶碗が轉げて茶が溢れ、筆筒の抽斗が地震のやうになつた」と云へば、如何にその劇しい格闘が行はれてゐるかと思ふ事が分るであらうし、「大きな拳が飛んだかと思ふと、飛鳴が起つた」と云へば如何に強く擲つたかと云ふ事が

言葉や文字に件ふ既成觀念からはなれて了つて考へて見ると好い。自分が初めて書かなければならぬ使命を帯びてゐるのだと思つて、すべてのものに對して見ると好い。さうすれば、あらゆるものは暗示的存在である。何物かの象徴である。かう考へて、書いたなら、自然と、暗示的に現はれるであらう。

直ぐ分るであらう。かう云つた風に、單に平面的な説明的描寫をのみ用ひずに暗示的に書くと云ふ事は、どれだけ、印象を深くし、含蓄あらしめるやうになるか分らない。

◎ 枯 野

「わあッ」と大口を開いて、彼は精一杯の聲を出した。聲は、廣い田圃の上を何處ともなく空しく消えて行つた。彼はうつかり自分の魂を打遣つて了つたやうな氣がして淋しかった。暮れかゝつた冬枯の野道に、彼は悄然として立つてゐた。「チ、」と嘎れてきた聲に、驚いて目を上げると、地平線





この方の間に小鳥が二羽吸ひ寄せられて行つた。この文章などは暗示的に枯野を描いたものとして、立派に成功してゐる。何の説明がなくとも、廣い枯野の寂しい荒れた光景と、そこを歩いてゐる青年の周囲の寂寥に迫めよせられて、黙つてはゐられなくなつた空虚な心持とが、よく暗示されてゐるではないか。確かに、模範とすべき價値があると思はれる。

諸君はよく味うて見て、會得する事が必要である。

五 調子と整頓

よく流麗だとか奔放だとか云はれる文章は、屹度調子が好いと云ふことである。緩急強弱の差異こそあれ、調子が好いと云ふ意味に於ては變りがない。

調子が好いのは讀む方でも氣持が好いものだ。些の滯なく、すら／＼と淀みなく頭に入つて行くのだが、何事にも一利一害は免れないもので、調子負けがして、却つて内容がお留守になり、空疎になり、従つて讀んだ方でも、これは面白くない！と思つて讀んで行くうちに、直ぐ終りになつて了ふ。そして、飽つ氣なさに、何アんだ！と失望の嘆聲を發することがある。それからまた、何かありさうで、後からまた、一體この文章は何を書いたんだらうと、再び讀み返して見なければならぬやうな事もよくあることだ。これ等は、内容よりも調子が勝つてゐるのと、貧弱な内容を調子でごまかしてゐるなど、種々な理由があるが、要するに、これは「調子」と云ふ事に伴ふ半面の弊害であつて、



調子が好いと云ふのは決して悪いことではない寧ろ、大いに好いと云ふべきである。併し、論文などで含蓄のある爲めに考へく讀まねば分らぬやうな場合は、勢ひ調子の悪い文章のやうに感じられるが、それは内容の如何によることで、如何に深遠な思想を書いたからとて、故意にむづかしく難解な調子の悪い文章としなければならぬ理由は少しもないのである。名文家の文章で分り難い時は、屹度讀者の頭腦がまだ幼稚でそれを理解する力がなるところから起因する讀みづらさであつて、調子が悪い爲めではないと思つてゐれば、先づ間違はあるまい。

私はこゝで、小品文の初學者に向つて註文するには、少し難解かとも思はれるが、調子を好くすると云ふことを

單に文章のみならず、演説や、人を評する時にも、あれは調子が好いか、悪いとか云ふ。大抵な場合は、その内容の意味を別にして云ふ風がある。だが、只外面の意味のみ調子が好いと云はれたとて、それは、名譽ではない。どうして内容の調子が流暢と云ふことに心を用ひればならない。

單に、文句にのみ苦心すべきでないことを知らしめたいのである。調子、調子と云ふことは、かり狙つてゐる結果、何等、内容と相伴はない技巧上の藝當をのみ演ずることに上達して來る恐れがあるからである。そこで、是非内容とびつたり合つて進んで行く文章の調子を出すことに力を入れなければならぬのである。それには、どうしても、作者自身の題材の發展に連れて進んでゆく心のリズムを文字の上には現はして行かねばならぬのである。文章ばかりが、如何に流麗であつても、調子がよくつても、そのみでは、最早新時代の文章と云ふことは出來ない寧ろ古い文章だ。

内容に伴ふ作者の精神のリズムが文章の上に流れて



出ると云ふことは困難に違ひない。しかし、それが本當の調子なのだから、如何ともすることが出来ない。リズムが溢滞すれば、筆を措いて、また淀みなく筆端に流れ出て來るのを待つより、外に道がない。それを無理に書かうとすると、徒らに文字だけの調子を出せても、内容とは離れ離れになつて、文字の裏に内容が淀み、流れもやらず堰かれたり、外れたりしてゐる醜態を見なければならぬ。そんなことは、實に文章の作者として、實にまづいことであり、恥ぢなければならぬことである。

諸君はよろしく、上來說ききたれる意味に於ての調子を尊重しなければならぬのである。併し、この調子——即ちリズムにつれて生れる調子に就いては、各自の努力

調子もなるべく、無理なつくつたものではなく、自然に自然にと心懸ければよい。こしらへたものでは、到底天真流露の調子は生れて來ない。要するに、内容から生れ出づる調子でなければいけないのである。

と研究に待つことにして、こゝでは、重に小品文と云ふ短かい形式に必要な文字上の調子をよくする事に就いて、更に研究の第一歩を進めようと思ふ。

調子をよくするには、勿論、文字を驅使する上の才氣の有無、優劣によつて、非常に結果の相違を來たすのである。或る程度迄は、細心な苦心と努力によつて、よく句法が整頓をすることによつて、才氣の乏しい人でも、調子をよくする事が出来ると思ふ。小品文の如きは、句法の整頓より進んで、更に全體の整頓に意を注いで、氣の利いた所謂山椒は小粒でもびりつとすると云つた意味の味ひを出すことは必要だが、先づ一つ一つ煉瓦を積みあげると云ふ建築の最初の努力として、句法の整頓に注意しなければ

秩序あり、整頓ありと云ふことは、凡ての事に肝心である。國家であらうが、一家であらうが、書齋であらうが——更に、人間の精神であらうが。



ばならぬ。これは前に説いた簡潔と云ふことと重複するやうであるが、調子をよくする上の整頓には自ら別様の意味がなければならぬのである。

只、簡潔々々と心懸けることは、よき意味での緊縮であるが、悪い意味での壓搾である。これを調子よく整頓すると云ふことは、出来るだけ壓搾して、そして適宜に伸ばすと云つたやうな意味に當ると思ふ。つまり酒などを製するのにいろんな不純なものを除き去つて、選精した少量のものを絞りとつて、再び器物に満たすと云つたあんばいである。無論、それも、自然に生れたものを尊重すべきであるが、先づ、最初は何事も習練である。思ふ存分に書いて、後から手を加へて、完全なものに仕上げると云ふ努

併し、それにも、型が出来るのはいい型をいつまでも守つてゐて、それが秩序だ。整頓だ。どと思つてゐては駄目だ。いけないものは省き、よいものはとり入れて、整頓させるやうにしなければならぬ。

力が何よりも必要であることを忘れてはならない。書きつ放しで、いつまでも打捨つて置くやうでは、進歩は見られないのである。

◎ 悲しい夕ぐれ

落葉のそよぎが悲しい迄に自分の心をそゝつて、絶え入るやうな蟲の鳴き聲さへ聞えて来る。何と云ふ悲しい夕暮だらう。まだそよぎを止めぬ枯葉を歩む日。憎らしい程、落着いて、透くやうな明るみからしら／＼と逃れる夕べの物寂びが腫に痛んで来る。黒み行く夕暮の物象の總てに淡々しい哀感を押へて、何事にも思慕の心を動かす時、總ての物象は自分の悲みであり、其の悲みは直ちに思慕となるのである。



如何にも調子の好文だすらくと淀みなく、讀者はよし中途で立ち止まらうとしても、その調子にひつばつて行かれて、一氣に讀了する文字も中々氣の利いた氣取つたのを用ひてある。何となく、作者が才氣あり、深い思想を有してゐる人のやうな氣がする。天晴れの名文家になる望みがありさうに思はれる。だが併し、待て暫し！ さううかうかと、作者の才に魅惑されて了つてはいけない。一つ仔細に點檢して見なければならぬ。第一に氣になるのは、悲しい夕ぐれの氣持を書かうとした者としては、作者の實感が率直に現はれてゐないことだ。悲しいと云ふ文字は數多く使つてゐるが、一體何がそんなに悲しいのか。自然の風物の推移などに伴ふ哀感に動かされるこ

無秩序のうちの秩序、不整頓のうちの整頓と云ふことばも云へないことばはない。それは、一見さう思はれても、ちやんと秩序があり、整頓があることである。淺薄な人間、淺薄な文章には、只外容だけの秩序らしき、整頓らしきがありながら、一本釘が足らないやうなところがある。だから

とはよくある併し、この文章のやうに只悲しいと云つてゐるだけでは、具象性がないから心を衝き動かす力が乏しい。また、透くやうな明るみからしらりと逃れる夕べの物寂びが瞳に痛んで来る。なども大變氣が利いてゐて、意味深いやうであるが、そこから透徹した感じは傳はつて來ない。極めて不透明である。黒み行く夕暮の以下も徒らに文字の上の遊戯が施されてゐるのを感じるのみである。

文章も小手の先で整頓ではなく人格精神を以てするやうにしなければならぬ。

これはもつと率直に正直に書くべきであつた。文字の調子にひきずられて行つた跡が歴然としてゐることは、蔽ふに由なき事を感じられる。これは、文字の調子の爲めに失敗した例と見てよからう。悪く云へば、つぎはぎにい



ろく／＼な文句をよせ集めたのであつて、そこに眞の整頓と云ふ斧鉞が加へられてゐないのである。そのまゝで斧鉞を加へる段になると、恐らくその全部を抹擦しなければならぬことになるかも知れぬが、今試みに調子をよくすると共に、整頓して見ることにしよう。併し、これは作者の心持を想像してやつて見ることにだから、或は不幸にして、大變見當違ひなものになるかも知れないが、兎に角幾分の参考にはならうと思ふ。

あたりには絶え入るやうな虫の聲が聞える。枯葉の上をわたつて行く日脚は憎らしいほど落付いてゐる。だが、その影から逃れ去る眞晝の影は捉へん術もないやがて、刻々に黒ずんで行く物象に對して、悲哀

のこみあげて來るのを覺えた併し、その中には何とも云はれぬ思慕の情があつた。自分にとつてはすべての悲哀は思慕であり、思慕は悲哀である。場合が多いのだから、  
とでも直せば、調子も好くて落付いてゐるし、全體が整頓されて、讀者の感銘も深くなるだらうと思はれる。それに、第一何を作者が語らうとしたものであるか、はつきりと分つて好いのである。

◎ 哀 調

黄昏が靜かに萬象を包む。  
疎らに紅葉した森の中の寺から、哀調を帯びた鐘が長い餘韻を響かす。

整頓の出來てゐない文章は多く、頭の中での組立てがうまく出來てゐないからである。だから、先づ書く前にそれをやつて、書いてから、更によく整へるやうな工夫をしなければならぬ。



ちつと聞いてゐると生の最後を思はせる様に無氣味になる。

次第に電燈がはつきりして来る。

私は岡を廻つて堀の上へ出た。其處には多數の種々な大きい古木が物凄く繁茂して枝が堀の水迄達して居る。

何處からか家鴨を呼び歸さうとしてゐる若い女の朗らかな聲が馬鹿にセンチユアルに聞えて来る。

この文章などは断片的過ぎるし、また月並な心持しか書かれてゐないが、まだしも不透明不鮮明なものよりは、幾らまじりだか知れない。それに、句法の調子と、整頓と云ふことに可也意を用ひられてゐることが分る。これでもう

少し細かに心持を出すやうにすると共に、全體の統一を圖ればよいのである。

整頓させるると云ふことも、何も鑄型に箝め込むやうな窮屈な不自然なことをせよと云ふのではなくて、人間でも容姿を整へることが心持よくもあり、且つ禮儀でもあつると同じやうに、必要なことである。それをいつも帶は解けかゝり、髻は蓬々と伸びてゐるやうなだらしない風體をしてゐては、乞食か白痴かに間違へられても仕方がないではないか。よくよくこの理窟を辨へてゐて欲しいと思ふのである。

六 ウイツトと警句の活用

ウイツトとは機才とか頓智とか云ふものである。警句



もそれに似たやうなもので、人の意表に出るやうな云ひ廻し方をするのを云ふ。

で、このウイットと警句とは丁度兄弟のやうなものである。一見して、いづれが兄たり弟たることを、ちよつと見分け難いときもある。併し、ウイットは文章の到るところに用ひても、殊に評論的の小品文に於ては生きて来るが、警句はさうは行かない。また、そんなにのべつ幕なしに奇抜な警句を連發し得る人はないであらうが、兎に角警句ばかりで成立する文章などのあらうとは思はれない。よしあつたところで、大して敬意を拂ふわけには行かないであらうと思はれる。何故かと云ふと、警句と云ふものは得て、街ひ氣味になり、氣障になり、嫌味になり易いからで

ある。それを巧みに使つて、あつと思はせるところに、文章の妙味と云ふものは出て来るのである。

それに、一體ウイットや警句と云ふものは、讀む人をして、あつと云はしむる快味があると同時に、文章そのものを引きしめて行き、鋭く印象せしむる効果が非常に多い。それだけに比喩とか、暗示など云ふものよりはもつと直截に、端的に讀者に迫つて行く力があるものである。その代り、一面に於ては、ともすれば難解になり、わざ／＼説明しなれば合點が行かないと云つた點もないではない。延いてはまた邪路に入つて低級に洒落や、地口の類と何の選ぶところなきに至ることもある。それは、案ずるに、作者その人の人格や氣稟によることであるから、誰に向つ

頓智頓才は多くその人の天性に負ふところが多いから、自分で造り出すことは困難かも知れないが、併し、實際の上のこと、違つて、文章の上のことはまた違つた味のものである。それに、さう亂發する必要はないのだから、學んで至り得べき餘地がある。でそれをうまく活用すると、否とによつて効果があるやうにもなり、また失敗するやうにもなるのである。



ても、矢鱈に註文することは出来ないが、文章を學ぶの士は、よろしく、さう云ふ邪路に踏み迷つたり、低級な趣味に陥りながら、それを歡ぶやうなことがあつてはいけなないのである。

また、ウイットの爲めのウイット、警句の爲めの警句を弄ぶやうなことがあつてはならない。一面から云へば、このウイットや、警句は、ある程度迄は學び得るかも知れないが、多くは先天的のものである。だから、さう云ふことに不得意な人が、何も好きこのんで、無理遣に、脳味噌を絞つて、ウイットや、警句を造り出さうとするには及ばないのである。そんなことをせずとも、文章は結構作れるのだから、只併し、こゝに、特にこれに關する一節を設けたのは、文

章の上、これ等のものが、力ある働きをするの故あるのみでなく、誰しも一通りは知つて置く必要があると思つたからである。それに、由來、ウイットを得意とする人、若しくは警句を得意とする人のそれよりも、その他の人に時として、偶發的に湧き上つたり、浮んだりするものゝ方に、如何にも自然で、それでゐて、一句にして肺腑を抉り、一篇に畫龍點睛的效果を奏する事が少なからずあるからである。さうした場合には、作者の方では却つて、これはウイットだとか、これは警句だとかと、意識的には思つてゐないかも知れないが、これを客觀的に見て、非常な掘り出しものをしたやうに感ずることが屢々あるのである。さうしたものゝ方が却つて尊重すべきものであるかも知

ウイットはウイットそれ自身に價値があるのではない。その中に含まれた眞實が基礎になつてゐるからである。



れないのである。何れにしても、こしらへもの、こねあげたものでは、力がない。生命がない。自然にふつと浮んだものの方が、どれだけ価値があるか分らないのである。  
ウイットには軽いユーモアが伴ふことが多い。警句には嚴肅にして直ちにといめを刺す底の皮肉で苛辣な味を伴ふ場合が多い。前者の好き例としては、森鷗外氏、夏目漱石氏の文章がある。後者の好き例としては、齋藤綠雨、國木田獨歩氏の文章に見ることが出来る。思ふにそれ等は、その人格や思想から生れるものが多いらしい。學んで得易からず、努めて、及ばないと云ふ感がする。畢竟これは單に文字とか、技巧とかの方面からのみ見るべからざるものだからであらう。

短歌や俳句などにもウイットは必要である。併し、徒らにウイットに走つたものは、狂歌や、狂句になるのである。文章も同じことである。だから、餘程、慎重に用ひるやうにしなければならぬ。只、一場の駄洒落に終つては駄目である。

只、初學者に豫め注意して置きたいのは、低級なユーモアや、下劣な皮肉をとり入れないと云ふことである。そんな風では、折角のウイットや、警句が效を失ふばかりでなく、文章全體、否、作者自身の人格に迄累を及ぼす恐れがあるからである。  
ウイットや、警句を用ひて、一きは引立たせるのは、同じ小品文の系統に屬するもの、中でも殊に議論風のもの、感想體のもの、それからハガキ文などである。ハガキ文は通信文であるから、どうしても平凡に終り易い。只、用さへ足りれば好いと云ふ考へがどうも煩ひするものと見え、その爲めに、大抵の通信文は無味乾燥で、どんな用事が出来たのか知らと云ふ氣懸りのある爲めにのみ、嫌々と



りあげて読む場合が多い。従つて返事を出す方でも、只も  
う用件のみを走り書きにして出す。かう云ふ事は是非考  
へねばならぬことである。お互ひに會つた時だと、實にう  
るさいと思ふ位丁寧に挨拶したり、いらぬお世辭を云つ  
たりして、さてその次ぎに肝心の用件をきり出す位なの  
だから、ハガキ文などを書く時は、時間から云つても、努力  
から云つても極めて少なくて済むのだから、少しは氣をつ  
けて面白く読ませる所謂『趣味の書簡文』に叶ふもの  
が必要ではないかと思考せられるのである。それには、是  
非冗漫や、無駄を避けて、而かも面白く読ませねばならぬ  
必要上、ウイットや、警句のうまい人は非常に得をするこ  
とになるわけである。

◎ 悲しい謎

私は今日も亦棕の下へ来ました。

一枚の葉もない枝にはひからびた黒い小さな實が  
鈍い冬の夕陽をあびてゐます。一羽の小鳥が私に驚  
いてまひたちましたが、低く枚の上を一周して又チ  
チと鳴きつゞけてゐます。小鳥と黒と私と——謎！、  
悲しい謎だ。私はさう思はずにはゐられませんでし  
た。

私が物思ふ唯一のこの古木の下祖先からあるこの  
古木。二三日の中に切つて賣られて了ふのです。私は  
瞑目して幹によりました。

この文章はウイットに於て優れてゐるばかりでなく、



可なりの効果を現はしてゐると思はれる。單に圈點を打つて置いた一句のみでなく、全體がウイットによつて、却つて氣の利いた纏つたものになつてゐると云ふ感じを與へられるのである。本當から云へば、この文のもつた内容——即ち作者の心持は暗い悲哀に満ちたものでなければならぬのである。併し、さうだからと云つて、それを重苦しい情調や、色彩を以て書いて行つたならば、小品文としての特色を失つて了ふことになる。それを緩和する爲めに、ウイットを用ひて、かく迄、すつきりと、その光景と共に、自分の心持を出すと云ふことは、ちよつと初學の人の及び易からざることである。かうした種類の文章の旨い人には、現代の文學者のうちには、小山内薫氏がある。

ウイットは文調に輕快な味ひを添え、そして、全體をひきしめる力があるから、小品文には殊に必要である。そして、極端になり易い内容をもそれで以て緩和することが出来

併し、どうかすると、才氣が勝ちすぎて、浮ついたり、輕くなつたりする憾みがないでもない。芥川龍之介氏にも矢張ウイットの勝つた文章があるやうだ。  
次ぎは、警句に就いての例をあげなければならぬが、古人や名士の格言めいた言葉は皆な警句めいた言ひ廻し方や、表現がしてあり、また、何誰の警句集と云つたやうな書籍も數多く出版されてゐるから、殊更に管々しく説明する迄もなからうが、普通の小品文として、あまり適當な例にもならないであらうが、手近にあつた書籍の中から、無名の人の手になつた短文を引いた見る事にする。

◎喜と悲

秋は萬物熟して收穫の期である。空は何處迄も深く



青く、山も川も清い。そして、日に青く紫に澄んで行く。が、之に反して草木は紅葉する。——いはゞ最後の花である——そして、青より黄に紅に、淋しく枯れ凋んで、徐ろに來春を待つ時である。一は愈々榮え。一は愈々衰へて行く。喜と悲との交互期である。暮れ行く悲みの中に楽しい收穫がある。丁度空や山川の榮えるところ、草木の老いて枯れるやうな關係がある。そして、楽しく侘しい時期である。之が秋の特色だ。

これなどは嚴密に云へば、幼稚で、表現の拙い文章である。併し、圈點をつけた以下の文句には警句と稱すべき内容と形式とを持つてあるものがある。これがもつと、洗煉され、含蓄のあるものになつて行けば、それで立派な警句

になるのである。だが、くれぐれも繰返して置くことである。が、半熟の氣障なひとりよがりの警句などを亂發して、鼻もちのならぬやうな嫌味な真似だけはしないやうにお勧めして置きたい。

國木田獨歩氏は曾て、自分が釣の好きな事を人に語つた時に、人は時に賢明に倦む。そして、愚者に返りたくなるものだ。僕が釣に行くのはその爲めだ。と云ふ意味の言葉を以てしたさうだ。これなどは立派な警句になつてゐる。その一語の含んだ内容は別に新らしいことではない。別の言葉で屢々云はれたかも知れない。而かも、それが新しい言葉であるかの如く響くのは、全く警句の力である。僅か一句にして、人の肺腑を衝く。これを云ふ方でも、聞い

「警句集」などによつて、文章を學んではいけない。初學者は矢張りあたりまへに忠實に書く事から初めなければならぬ。そして、殊更に警句を使はうとして、あせつたりしないで、自然に出で來るものをよく、精練した言葉で現はすやうにしなければならぬ。



てゐる方でも、覚えす案を打ちたいほど、すいと胸の透くやうな氣持になるに違ひない。

ハガキ文に特にウイットと警句が活用すべき要あることは既に前に説いた。左に一寸短かい例を作つて見る。

『花あり見るに堪ざれば直ちに折るべし』と云ふ古

い詩の文句があるね。常々さう思つてゐても、矢張、自

分の家の庭にある花は愛着があるね。この貧弱な一

本の櫻の花を見ながら君と半日の清談を試みたい

と思ふ。願はくは、窮屈な席での山海の珍味よりも、藁

屋の大根菜つ葉の方が旨いと云ふ、その心持でやつ

て来てくれ給へ。今が丁度見頃だから、但し、明後日の

日曜の午後に、恐縮ですが、ちよつと此者に御返事を

警句は一步間違ふと、意味が曖昧になる。また、ちよ

お託し下さい。

あまりうまい文章ではない。それに、ウイットや、警句が充分活用されてゐる程のものとも、公言出来ないが、まあ

かう云つた調子でやれば、普通の形式一點張りの案内文

よりか、どれだけ、友の心を動かし、満足と與へるか知れない

のである。よし、來られない迄も、必らず、歡んで、急いで返

事の筆を執ることは想像するに難くない。

これは、隔てのない友人のところへやるハガキ文程度

のものだが、これを、父母の許へ、或は親類先輩、或は商業上

取引先へでも、それ相當に、人に應じて、うまく書いて出せ

ば、相手の氣持をよくせしむるのみならず、益々兩者の間に

親交を増し、商業などには大いなる利益を得るやうに

つとの違ひで輕薄になる。ハガキ文などは、殊にこの弊を避けるやうに工夫しなければならぬ。



ならぬとも限らない。

先づ、利己的の事などは考へない迄も、文章の上の一法として、殊に、小品文の真髓となるべき一要素として、是非充分研究して見る必要があるのである。

七 推敲はどう云ふ風にすべきか

推敲とは文章を鍛錬することである。即ち自分の書いた文章を自分の手によつて、削つたり、添へたりして、充分完全なものにしようとするものである。これは是非しななければならぬ。

既に一家をなしてゐる人でも、随分苦心をして、推敲するものである。所謂彫心鏤骨の苦心をするのである。況んや、初學者にあつては一層のこと、苦心して行かなければ

ならない。ちよつと考へると、頭の中では、立派な物が出来上つてゐるやうに思はれるが、さて紙を展べて、書き初めると、中々思ふやうに出て来ないが、それを無理遣に書きあげる。そして、一通り読み返して見ると、思つたことの十分の一も現はれてゐない。そののみならず、まるで支離滅裂である。統一もなければ、中心もない。書く事が前後したり、見當違ひの文字が使つてあつたりする。かう気がついたならば、直ぐに失望の餘り、放棄するやうなことはしないで、それを念入りにこつ／＼と直して見なければならぬ。文句を置き換へて見たり、文字の妥當でないものは削つたり、誤つてゐるのを正したり、いろ／＼なことをやつて、意味も通り形も整ひ、そして、文章のうま味を出すやう

書く時には、うん／＼なりながら苦心をする人が多いが、推敲のため、そんな苦しみをする人は先づ少いやうである。併し、初學者にはどうしても必要だ。書く時には割合にさら／＼と正直に書き續けて置いて、後から第三者になつて、よく批評解剖をして、充分推敲しなければならぬ。



に工夫するのである。これが「推敲」である。  
併し、推敲と云ふことも、餘程意を用ひなければならぬ  
ことで、その爲めに却つて原文より悪くなるやうなことがあつてはならぬ。折角の苦心と手数が何にもならないことになる直さうとするからには、そんな馬鹿げた結果を招くやうなことはあるまいと思はれるが、誰でもよくやり害ふものである。それは何故かと云ふと、最初書いた時は、自分の心に映つた第一印象を書くから、まづ、眞實に近いわけたが、それをすつと後になつて單に文字などに拘泥して、第一印象を顧みずに、訂正改削するからである。爲めに文字面だけの訂正が出来て、肝心の中味になるべきものが失はれるやうな恐れがある。だから、推敲は餘程

推敲は要するに仕上げである。荒彫りのまいでも、彫刻は、價値はあるが、それは未完成であることに、變

細心な注意を要するのである。  
文章の推敲と云ふことは、現代の人よりも、却つて、昔の人の方がよくやつたやうである。文體その他の關係もあつたからであらうが、本當に文字通りの彫心鏤骨の苦を嘗めたやうである。明治時代になつてからでも、尾崎紅葉氏などは最もこの苦心をされたやうである。少し後には小栗風葉氏がある。その原稿の下書などを見ると、塗抹縦横で、殆んど読み通すことが出来ない程である。現在では、鈴木三重吉氏の如きは、最も甚だしい方で、最初に書いた第一稿の如きは、或る部分は殆んど改められて、原文は一字も残らないと云つた風にされるのである。只何人でもこんなにまですることは好いか悪いかは明言出来ない。

りはない。推敲はこれを完成させる爲めの努力であると思へば間違ひはなからう。



その人の性格や文章によることだから、一概には云はれないが、兎に角、推敲が如何に必要なるものであるかを示す例として挙げたのに外ならない。

前に、現代の文章家は昔の人に比べては、推敲することが、すつと少いと云ふことを述べたが、それは、文章にも次第に變遷があつて、今では殆んど皆言文一致を用ひ、文字もなるべく難解な漢字などを避けるやうにして、自由に書くやうになつたからであらうと思ふ。併し、その代りには、別の意味の推敲が重んじられて來てゐる。單に、文章の上での辭句の配置や、文字の按配などに關する推敲よりも、寧ろ、内容とびつたり合つた表現をしようとするところに起る推敲である。是が、文字よりも内容本位になつた

證據である。今の若い人はどうも文章がまづくて困ると云ふことは、よく一時代も二時代も前の人からきく事であるが、なるほど一理はある。確かにまづくなつたに違ひない。だが、その代り、昔の人のやうに文章の爲めに文章を書くやうな無用の努力や、苦心はしないのである。すべて、自己の爲の文章と云ふ意識の下に書くのだから、自然その善悪巧拙に對する標準が變つて來たわけである。

だから、現代の青年諸君は、この新しい標準によつて、文章を書き推敲しなければならぬのである。さて、こゝに實地の推敲をしてお目にかけてやう。題は「枯葉」として、今日の午後ちよつと山へ遊びに行つた印象を書いて見よう。小品文と云つても短文だから、だら／＼と



長くならないやうに、初めから一つ極々簡単な文句に初  
めて見よう。何よりも、強く印象されてゐるところを鮮や  
かに現はさねばならぬ。

枯葉が踊つてゐる。さら／＼、さら／＼……

黄色い午後だ。つういと葉は高くあがる。空は反古紙  
の様な雲だ。光の斜線が雲をよぎつて山肌に落ちて  
ゐる。山の煙、枯葉は騒いでゐる。代り番こに舞ひあが  
る男は煙草をすてた。

さあ、これでやつと出来上つた。なるべく簡単に、多くの  
事を書くつもりで、精々自分の才のありつたけを出して  
やつて見たのだが、読み返して見ると、どうもまづい。何だ  
かごた／＼として、折角の印象描寫が臺なしになつて了

つた。それに、何だか才筆振つて氣障になつた。作者の位置  
も不明である。どこにゐて、枯葉を見てゐるのか、山の煙を  
見てゐるのか、分らない。最後の「男は煙草をすてた」も、氣を  
利かした積りなのだが、蛇足のやうに思はれる。とつてく  
つ／＼けたやうだ。こりや、どうしてもうんと推敲をして、も  
う少しはつきりした、まとまりのある文章としなければ  
嘘だ。

初めから、枯葉が踊つてゐる。としないで、さら／＼を上  
へ持つて行つた方がよいやうだ。

「黄色い午後で、は、矢張りあたりの色彩に對する感じか  
ら來たのだから、空は反古紙のやうな雲だ。」とくつ／＼けた  
方が散漫でなくなるかも知れぬ。その後へ、光の斜線、云々」







の必要を感じて来るに相違ない。  
推敲と云ふことは、必らずしも、長いものを短かくし冗漫なものを簡潔にする爲めの用のみだと誤解してはいけない。長くする必要あらば、いくら文字を加へても差支はない。また短かくしなければならぬ必要があれば、容赦なく、惜氣もなく削り去り、除き去るがよからう。要は、如何にして、よき文章にすべきかと云ふ一點にかゝつてゐるのだから。

### 第五章 いろいろの形式に就いて

#### 一 内容に伴ふ形式

内容あつての形式であるから、特に形式を離れて考へて見る必要はさらくないのであるが、便宜上、文章の種類を叙事、抒情、論文、書簡文等に分けられてゐるから、一通りそれ等の別によつて生ずる形式に就いて考察して見るのも、無益の業でもなからうと思ふ。  
如何に初步の人だからと云つて、叙事が主となるべきものを抒情的に書いて見たり、抒情文を議論文のやうに書いたりする人は、先づあるまいと思ふが、一通りはそれぞれ性質を的確に呑み込んで、見當違ひのないやうにし





なければならぬ。

叙事文の形は何よりも先づ事物を明晰に述べ、順序よく書いて行かねばならない。理性の克つたものになるのは、當然であらう。併し、そこに形容詞とかウイットなどが入つて来て、自然と文章に綾が出来、味ひがつけられて行くのである。だが、先づはつきりとした言葉で、鮮明に叙して行くのを第一の要件としなければならぬ。

木曜日の晩によく落ち合った人は、以上の外高濱虚子氏、坂本文泉子氏など、それから松根東洋城君、初めの頃は篠原温亭君などもよく来てゐました。一と頃はよく銘々の創作を持寄つて讀んだ時代もありました。虚子さんがよく讀んでゐました。あのストラ〜

文學でも好むと云ふ人には叙事文の下手な人が多い。自分の氣分や心持を書くのに巧みな人でも歴史的事實を記録したり、人事を叙してゆくのに拙劣である。叙事と云ふことは、事柄に主きをおかねばならず頭の明晰なことが必要だからだ。

と氣どらずに明瞭に、そして、ポツ〜と分りよく切つて讀んだ聲が耳について居ります。それに比べると鈴木君の讀むのは大に芝居氣があつて色氣があつたものです。僕も時々まづいものを持つて行つて悪口を云はれたことがあります。

森田君の「煤煙」の初稿も其處で讀まれました。その時はいつもの如く多勢集つて雑談してゐました。當時寫生文一點張りの虚子さんが何でも寫生文の立場から大にその文章表現法を非難したのを記憶してゐます。生籬の下に犬ころが寝ころんでゐたりする所の描寫があつただけを僕は奇態に覺えてゐます。森田君の其時の原稿は夏目先生にもいろ〜批



評されてゐたやうでした。これは野上白川氏が夏目漱石先生宅で開かれた「木曜會」の思ひ出を書いた一節である。別に苦心されたものでもなし、只淡々とした文章で當時の事を思ひ出されるままに叙して行つたのであるが、流石に落付いてゐて、少しも紛らはしいところがなく、はつきりと書かれてゐる。叙事を主とした文章はかう云ふ風に行かねばならないと思ふ。古いものでは「源平盛衰記」や「平家物語」のところ々には事を叙するの文として模範として學ぶべきものが非常に多い。それから下つて徳川時代の學者文人の假名交りの文章にも多くある。

抒情的になると、どうしても餘りに自分の歡び、悲しみ

とか、感激などをそのままにぶちまけて了つて讀む人にはそれほどの同感を惹き起さないやうなことが多い。それは、單に抽象的な書き方をするのみで、一體何がそんなに嬉しいのやら、悲しいのやら、少しもそれが示されてゐないからである。これはつまり具象性がないからであつて、書く前に細かに自己の情緒の動きを省察し、批評して、現實味を與ふることに苦心してゐないからである。人の感情の動き方と云ふことも、これを普遍的に、抽象的に云つて了へば、皆な同じやうなものである併し、それが實際に觸れて、さまざまに動いて行く所の特殊な作用にはさまざまの相違がある。そこを促へて書き現はすやうにしなければならぬ。最早、只月を見ると悲しいとか、蟲の

新時代の新らしい、抒情文には何よりも、現代に生きてゐる人の眞實の感情が現はれなければならない。人情には變りはないと



聲をきくと哀れを感じる」と云つたやうなことはかりで  
は、到底新しい抒情は生れて來ないのである。現代の人  
は、もつと情の動き方が複雑になつて來てゐる筈である。  
だから、その複雑な特殊の情の動くところを書かなけれ  
ばならない。

彼の有名な高山樗牛氏の「我が袖の記」とか「瀧口入道」  
や、その他、その頃の文學者の書いた美文と云ふもの、中  
には、好い抒情文が多い併し、それも、現代人の感情と比べ  
れば、ずつと單純で、強く動かされるところは、少くないと  
思はれる。現代の人の中では、永井荷風氏の書いたもの、  
中には、新しい抒情文の範とすべきものが多し。

「あゝ、われ獨り覺めたり！」

は、よく云ふことだが、同じ戀愛の感情でも、非常に複雑になつて來てゐる。そして、批評的になつて來てゐる。それを書き現はさればならぬ。

併し、これは一夜のことである。短い旅の途上で眠れぬ者の悲みである。單に一夜を徹した位のことでは、其の日の戦ひに必らず敗れるものときまつてはゐない。

けれども、もしこれが人生の長い旅の途上であつたならばどうであらうか？ そしてもし自ら覺めてゐると信じてゐる者が、實は眠らずして覺めてゐたのであつたならばどうであらうか？ 疲勞は其の人に來ないであらうか？ 我れから倒れる悲惨を自ら招かずに濟むであらうか？ 況してや人の先頭に立つて行く手の道を指示する資格があると自ら許していつまでもゐられるであらうか？



あゝ、人々はまだ眠つてゐる。自分達を乗せてゐるこの小さな世界が、烈しい動搖と轟きを與へてゐるのも知らぬかのやうに、靜かに穩かに眠つてゐる。そして獨り覺めてゐるわたしだけに、夜は徒らに更けて行く。

これは、前田晁氏の「眠れぬ者の悲み」と題して、夜汽車に乗つて旅する時の心持を書いたもので、他の乗客がみんな眠つて了つたのに、自分ひとりが眠れぬと云ふことから、かうした作者の感想を、抒情を主として書いたものである。僅かにこの一例によつても、新しい意味の抒情と云ふことが、單なる感傷主義の表現ではなくて、複雑になり、思想的になつて來てゐることを充分感得することが

出來るであらうと思ふ。勿論かうした感想や、感慨を洩らしたものは、抒情ではないが、これなどは、最も好適例として、特に紹介したのである。

叙景を主としたものには、紀行文と云ふ大物がある。併し、こゝでは、専ら小品文を主にしてゐるのだから、ちよつとした風景のスケッチとか、小さな場面の寫生と云ふことになつて來る。で、紀行文に迄は及ばないで置く方が便利であらう。

小品文に於ける叙景は、特に細かな觀察が必要である。それは如何に形式が狭小であつても、その中へ大規模の風景を縮寫することは出來ないではない。それをやつて、随分成功してゐる名文も多いのであるが、初學者の小品

新しい叙景文は、神經を働かさなければならぬ、また色彩に對する知識も必要だ。繪畫的に書いて、好成績を納めることが多からである。ま



文から入つて行く事は、一つの文章の練習の爲めでもあ  
るのだからなるべくちよつとした場面を選んで、それを  
細かに生き／＼と浮び出るやうに描寫する工夫や習練  
をしなければならぬ。

松林のなかには薄紫の草花が漂ふやうに、ほのかに、  
細徑を縁どつて咲いてゐた。頭上には年取つた松の  
枝が網細工を織つて、處々の空隙から八月の空をの  
ぞかせてゐたが、風はなかつた。その網細工は形を亂  
さなかつた。午後の日影が少し曇つて、一體が暑さに  
疲れてどんよりしてゐるやうな氣合を見せてゐた。  
たゞ時々、少し隔つて、下の方から波が来て、砂路に碎  
ける音がしてゐるだけであつた。ざぶん、ざぶん、とい

た、随分細かいと  
ころへ作者の神經  
を觸れさせなけれ  
ば、景色が生きて  
來ないからであ  
る。寫眞のやうで  
はいけない。

ふ波の音は、下の方から松林の中まで響いて來た。そ  
して、しつとりしてゐる林の中の空氣にかすかな動  
搖を與へて、奥の方へと消え込んで行つた。その波の  
リズムは小徑を縁取る下草の花に何ごとかを傳へ  
てゐるに違ひない。目に見えぬほどに微かに、その草  
の葉が波の響きでゆらいであつた。

これは、吉江孤雁氏の「松林」の一節である。これだけ、きり  
離して見ても、立派な小品文になつてゐるではないか。否  
や、小品文と云ふよりも、寧ろ散文詩に近いものとも云へ  
よう。孤雁氏が紀行文家として有名なことは何人と雖も  
よく知つてゐる。従つて、叙景の筆に獨特の手腕を有して  
ゐることは當然である。この一文によつても、如何に氏が



自然を見る眼の鋭く、そして細かで、その上深い愛情をさへ湛えた心を持つてゐる人であるか、分らう。自然の懐に突入して行つて、その奥秘を探るには、この深い愛と、敬虔な心とがなければならぬのである。孤雁氏の如きは、單に外面の描寫のみに満足せずして、自然の心を描かうとするところへ進んでゐることがよく觀取されるのである。

論文とか感想風の小品文となると、簡明率直を旨とすると共に、前に説いたウイットや警句が必要になるから、その形式も随つて、氣がきいてゐて、讀んでも氣持が好いと思はせるやうにならなければならぬ。所謂快刀亂麻を斷つ底の快味である。理路整然、文辭明晰でなければなら

ないのは云ふまでもない。

短文であるとして、その全部が警句から成り立つてゐるやうなものもある位だ。それは極めて自然の行き方であつて、短かいものゝ中にさう管々しく緒論から結論迄書いて行く事は出来ないからである。それに、新しい論文、感想文に於ては、さうした三段論法とか何とか云ふ舊式の形に囚はれないで、ぐんぐん自由に分の考へを述べて行くのが最も好いのである。

◎

ある人と英雄主義といふことを論じた。比較的完全な自由、比較的完全な獨立、自己の積極的交感、さういふ言葉がくり返された。フランスが今時分目覺はじ



めたのは意氣地がない。今時分になつて目覺めたか  
らとて、それが何の役に立つ？ それは目覺めない  
よりは好いだらうけれど、とてもドイツのやつたや  
うなヒロイズムに達するとは覺束ないもつと根本  
から出立して来るやうな覺醒の仕方をしなければ  
：こそれから比べると、ドイツはえらいもんだ。ドイ  
ツの文藝は混亂して、完成しないといはれてゐるけ  
れど、それでも新らしい傾向とか、新らしい努力とか  
云ふものは常にそこから始まつてゐる。文藝に於て  
も、ドイツが常にヨーロッパの先頭に立つてゐたこ  
とは疑ふべからざる事實である。それから比べると、  
ロシアなんかは、まだ芽生のやうなものだ。新らしい

芽は生えてゐるかも知れないけれど、その芽が何う  
いふ風に發展して行くかは將來を見なければわか  
つたことではない。  
民族主義のやうなものが起るのは結構だが、しかし、  
それには、それを指導し統率して行く人物がなければ  
駄目だ。要するに、一國の上から言つても、社會の上  
から言つても、人心が肝心である。大きな人物が肝要  
である。  
これは田山花袋氏の文章である。如何に自由に、率直に、  
明快に感想が述べられてゐるかを見よ。これによつて、充  
分作者がヒロイズムに對し、どう云ふ考へを有してゐる  
か。それに就いて、ドイツとフランスを比較し、文藝に及び、

感想文と云ふものは最近に生れたものゝやうだが、要するに論文に屬するものである。論文よりも一層碎け



最後に民族主義と云ふものに對して、斷案を下して、人物の必要を説くところ、斷片的のやうでありながら、自らちやんと秩序が立ち、論理が一貫してゐる。自由な感想的小品文の一例としてあげるのに充分價值のある文章だと思ふ。

◎ 歐羅巴は——東洋に對する西洋は、改めて長々と講釋するまでもなく、情意よりも寧ろ理智であり、直觀よりも寧ろ思辨であり、綜合よりも寧ろ分析であり、單純化よりも寧ろ複雑化である。而して、今や遺憾なくそれらの物の勞れてゐる、とりわけ十九世紀的の複雑化と、分析と、思辨と、理智とに、それらの物の所産

て自由に、自分の感じたことや、考へたことを書いてゆくところ、一種拘束のない境地がある。小品文にはどうしても、この感想文の形をとる方が便利である。

に勞れきつてゐる。亞細亞は——西洋に對する東洋は、その理智よりも情意である點に於て、その思辨よりも直觀である點に於て、その分析よりも綜合である點に於て、その複雑化よりも單純化である點に於て、今や現代の歐羅巴へ教へを垂れる者の地位に立つてゐる。少くとも遠き過去の東洋人等はその地位に立つてゐる。これは、生田長江氏の文章である。論の可否は暫らく措いて問はぬことにする。少くとも、その表現の様式の警句的なる點に於て、文字の驅使に才氣の迸る點に於て、敬服するに足るものがあると思ふ。何よりも、そのきびくとして、簡潔に複雑なるべき西洋と東洋との比較論を、僅々



十數行の文字に於て書き現はしたところにこの文の面白味もあれば、價值もある純論文式で、且つ警句張りの文章の模範として、こゝにひくことにしたのである。

二 日記を主としたもの

爰に説かうとする日記文は、實用的備忘的の簡單に只その日その日の事實を記録して置くにとゞめるものでなく、一面小品文の練習の爲に書くべきものを指して云ふことを承知して貰ひたい併し、それだからと云つて、日記と云ふものゝ本質を忘れてはいけない。日記の本質とは何ぞやと問ふならば、かう答へるであらう。曰く、眞實、曰く鋭敏、曰く自由、これだけのことを忘れてはならないのである。日記と云ふからには第一の目的としては、何の憚

日記をつけることは、文章の練習に利益あることは勿

るところなく、隠すところなく、その人自身の内外両面の生活を記すことである。これ即ち眞實でなければならぬ理由である。内外両面の生活を記するには、勢ひ、人事自然に交渉して来る。それを書くには觀察の鋭敏が必要である。それ等のものを遺憾なき迄に記しとゞめるには自由な心持でなければならぬ。他の何物にも拘束されず、煩はされない自由である。

かう説いて来ると、日記文の優れたものは、その人の生活が優れてゐると云ふ事が、一番根柢的原因になつて来るのである。だから日記をつけるると云ふことは、單に文章の修練として多大な効果あるのみならず、ふり返つて自分の生活を見せられるから、その人の反省を促し、向上

論だが、自分の生活を書きつけてゆくと、どうしても、過ぎて了つたことを、もう一度心のうちに繰返して見ると共に、それと文字に現はして見せつけられることになる。だから、どうしても、自分の生活について考へる機会が多く與へられる。かうなれば、日記と云ふことは一種の修養になるわけである。



を来たすやうになることは疑ひなき事實である。

こゝに云ふ日記文は前にも云つたやうに小品文の一種として云ふのであるから、一面趣味の日記文とも云ふ事が出来る。如何に平凡な、實生活の記録でも、自分が讀んでも、他人に見せても、無味乾燥なものでなく、その人の生活状態がさながらに分ると共に、趣味ある文章として讀むことが出来るからである。

例によつて、現今の文學者の作例を掲げて聊か評釋を加へて見ることにしよう。

◎ 朝床の中で、ゆうべ見た市村座の初日のことを考へる。——波野(吉右衛門のこと)の光秀が何日になく、

んく押して行つて今一と息と云ふ處まで來ると、急にフイと力が抜けて了ふ。何うかしたのぢやないかと思つて樂屋へ行つて訊いて見た。うんと力を入れようとするところ、と眼暈ひがしさうになつて困つたと云ふ。このあひだ内から九州路を打通して、博多から直行で歸つて來て、からだが疲れてゐるのだ。落付いて休養がさせてやりたい。波野のやうに「心の力」を身上とする芝居を見せる男には、とり分け休養が必要である。今日は何うしてゐるか。疲れが少しはなほつたか。近いうち又行つて見よう。電話でもかけようか知らん。——色々心配する。  
晝飯をすませてから、津田の椿の屏風の件で、從兄の



銀行へ行く。  
 晚桑港へついた友人から手紙が二通来た。この手紙は私の乗つて来た船で、又日本へ歸つて行く私も日本へ歸りたいと云ふやうなことを書いてある。讀んであるうちに涙が出て来る。勉強するつもりで行きは行つても、乗つて行つた船が出てしまへば、愈々日本を離れて遠くへ来たと云ふ氣が、しみく湧いて來ることであらう。ぼつりと一人ゐる淋しい魂が目の前に浮く。

これは、小宮豊隆氏のある日の記録である。しみくとした柔かい筆致である。讀んであるうちに、作者の優しい親切な心持が、此方の胸へ沁み込んで來るやうである。だ

日記を主としたか  
 らと云つて、心持  
 や感想を避ければ  
 ならぬ理由はな  
 い。その日の生活  
 で感じたこと、考  
 へたことあらば、  
 何でも一篇の文章  
 になるやうに書き  
 あげるのが好い  
 である。あまり書  
 かうとする材料に  
 こだはらぬが好  
 い。でないと日記  
 文は書けなくなる  
 から。

が心持を描くことが主になつてゐる。最良役者の健康を氣遣ひ、遠くにゐる友の寂しい心を思ひやることを書いてゐるのみであるが、併し、これはこれとして、立派な日記になつてゐるばかりでなく、また立派な小品文である。心の日記と云ふほどでもないが、先づ心持を主としたものとして學ぶべき點が多い。

◎  
 うちの女たち二人をつれて、北原白秋氏のところへ行つたら留守だった。ので、銀座の方を歩き廻つて午  
 前零時半に歸る。留守をしてゐた妻も書生もみんな  
 テーブルに集つて、毒を食ふ。私は日本酒をちびく  
 飲む。二時就寝。六時に起きる。鳩の鳥屋掃除。八時から



九時迄、中央大學豫科で講義歸りに龍山堂病院に入  
院して居る青木健作君を見舞ふ正午歸宅午寝三十  
分それから夕方まで私の全集第四卷の原稿の一部  
を訂正入浴食事手紙を五本書く伊上凡骨から四卷  
の表紙日本摺到着二卷の表紙をメレンスへ摺つて  
貰つて、おらくさんの帯にするのも出来て来た夜八  
時から十二時迄懺悔の校正終日働いて頭がかちか  
ちになる二時迄ビールを飯む下手な三絃を爪びき  
する。

これは、鈴木三重吉氏の日記である。これこそは、眞に實  
生活の記録である。自分の感想とか心持とか云ふことは、  
少しも書いてない。只事實を並べたゞけである。併しながら

ら、それで居て、作者の趣味だとか、どういふ心持で生活を  
して居るかとか云ふ事が、ぼんやりながらも想像出来るや  
うに書かれてある。そして、一篇の小品文としても、ちやん  
と纏つて居ると思ふ。流石は一代の文章家たるだけあつ  
て、すつきりと、垢抜けのしてゐるところなどは、及び難い  
ものがあると思はれる。只事實を並べて行きながらも、作  
者の生活気分のはつきり浮ぶやうな日記的小品文の例  
としては、誠に適當なものであると思ふ。

◎ 七日。

肉屋さんにつれられて、小さなよく肥えた丸い顔を  
持った、はつちやんといふ子供が来た。



可愛い顔をしてゐた。はつちやんはおとなしく家のなかに入つて来て、ちやんと坐るとお辭儀をした。肉屋さんは、

「おとなしくして、小母さんの云ふ事を聞いてゐるんですよ。また明日迎へに来て上げるからね」と云つて歸つて行つた。はつちやんは肉屋さんの歸つて行くのを淋しさうに見てゐた。私はまたちつと行儀よく坐つてゐるその子を見てゐた。そして、その子よりも、私の方が、たまらなく淋しく悲しくなつて来た。私はなにか云つてやらなければならぬと思ひながら、云ふことが口を出なかつた。すると、はつちやんは眞面目な顔をして聞いた。

「小母さん、お臺所はどこですか。」

「お臺所、その開きをあけるとさうなの。」

私は涙が出さうになつた。はつちやんはすぐ立上つて、その開きをあけて見た。そして、廣いお臺所できれいですね。私小母さんにお掃除もしたり、御飯もたいたり、水もくんだりして上げますわ。」

と云つて、今度は坊やの玩具箱を見つけると、その中の玩具を珍らしさうに丁寧の一つ／＼見初めた。

夜少しおそくなつて歸つて来た良人は、不思議さうに、小さな女の子が寝てゐるのを見た。そして、

「あの、八つになるつていふのが来たのかい。」

と聞いた。二人は、その子のあどけない可愛い寝顔を